

第2章 出火原因別火災状況

1 放 火

抽出条件：経過分類コード 「911 放火」、「912 無意識放火」、「921 放火の疑い」

- 前年と比べて、放火火災の件数が115件増加しました。
- 深夜から早朝にかけて、放火の割合が高くなっています。
- 地域別放火火災発生状況を見ると、100件を超える特別区が2つありました。

(1) 火災状況

放火（放火の疑いを含む、以下同じ。）による火災は、昭和35年から昭和51年までは、たばこに次いで出火原因の第2位でしたが、昭和52年から出火原因の第1位となっています。

平成25年中の火災件数は1,622件で、前年と比べて115件増加し、10年前の平成16年(2,513件)と比べると火災件数はおよそ30%減少しています。

また、全火災件数（管外からの延焼火災1件を除く。）に占める放火の割合は31.3%で、前年の29.6%と比べて1.7ポイント増加しています。

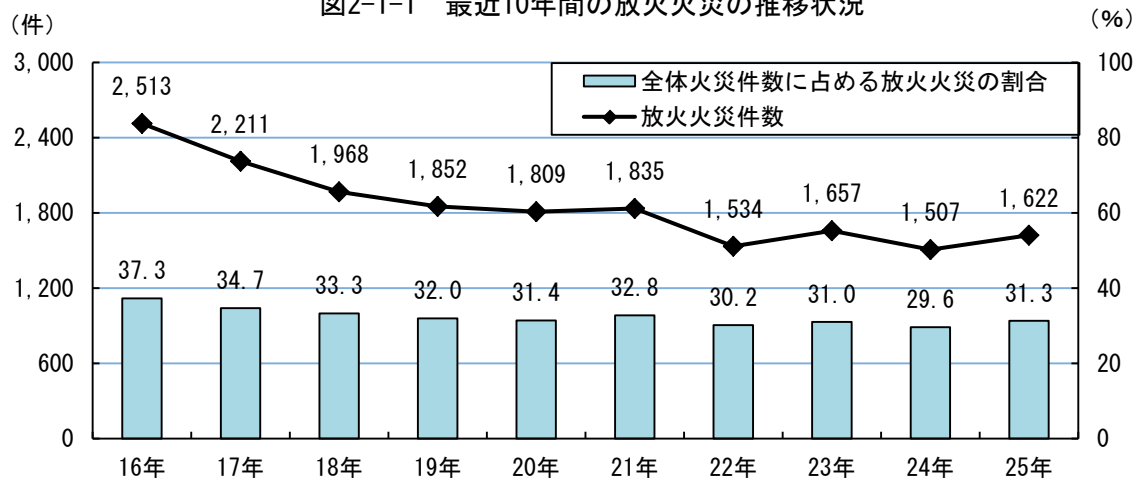
火災種別ごとにみると、前年と比べて建物火災が25件、その他火災が95件それぞれ増加していますが、車両火災は5件減少しており、林野火災は増減がありませんでした。

次に、損害状況をみると、前年と比べて焼損表面積、損害額、負傷者の項目において、前年と比べて増加しています（表2-1-1、図2-1-1参照）。

表2-1-1 年別火災状況（最近10年間）

年 別	火 災 件 数									損 害 状 況				
	合 計	建 物					林 野	車 両	そ の 他	焼 損 床 面 積 (m^2)	焼 損 表 面 積 (m^2)	損 害 額 (千円)	死 者	負 傷 者
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や								
16	2,513	1,052	65	29	145	813	37	177	1,247	8,357	2,549	1,620,847	36	144
17	2,211	1,026	47	32	166	781	9	158	1,018	7,745	4,053	1,677,508	32	135
18	1,968	876	47	19	151	659	4	136	951	8,752	2,723	1,507,603	40	129
19	1,852	763	33	11	137	582	-	136	953	5,474	2,089	1,135,790	42	129
20	1,809	807	31	18	113	645	3	92	907	4,804	2,193	911,662	28	143
21	1,835	745	26	18	118	583	-	94	996	5,779	2,179	981,769	36	105
22	1,534	646	25	10	92	519	1	69	818	4,052	1,870	677,432	18	80
23	1,657	632	30	22	99	481	3	75	947	5,027	1,580	700,670	25	107
24	1,507	615	28	6	82	499	1	54	837	3,746	1,202	604,385	26	77
25	1,622	640	30	10	76	524	1	49	932	3,709	1,499	633,398	16	82

図2-1-1 最近10年間の放火火災の推移状況



注 全火災は治外法権火災及び管外からの延焼火災を除いています。

(2) 放火火災の傾向

ア 月別と時間別の発生状況

(7) 月別発生状況

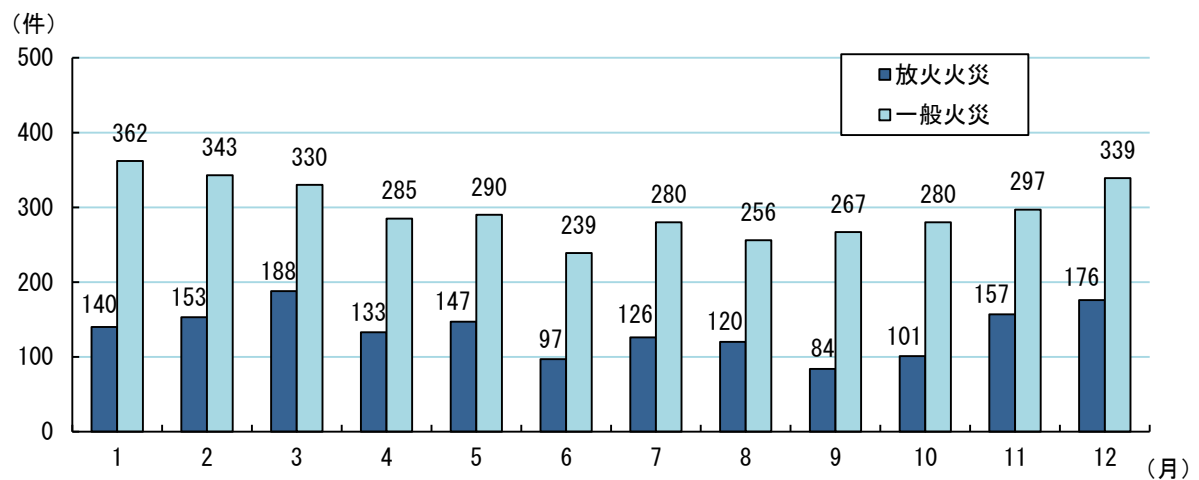
放火以外の火災（以下「一般火災」という。）と放火火災の月別発生状況をみたのが図 2-1-2 です。なお、管外からの延焼火災の1件は除いています（以下同じ。）。

一般火災は、1月～3月及び12月が300件を超え、6月が最も件数が少なくなっています。

放火火災は、3月が最も多く188件発生しており、9月が84件で最も少ない件数となっています。

また、各月の火災件数に対する放火火災の占める割合をみると、概ね31%で、3月が36.3%で最も高い割合となっています。

図2-1-2 月別火災状況

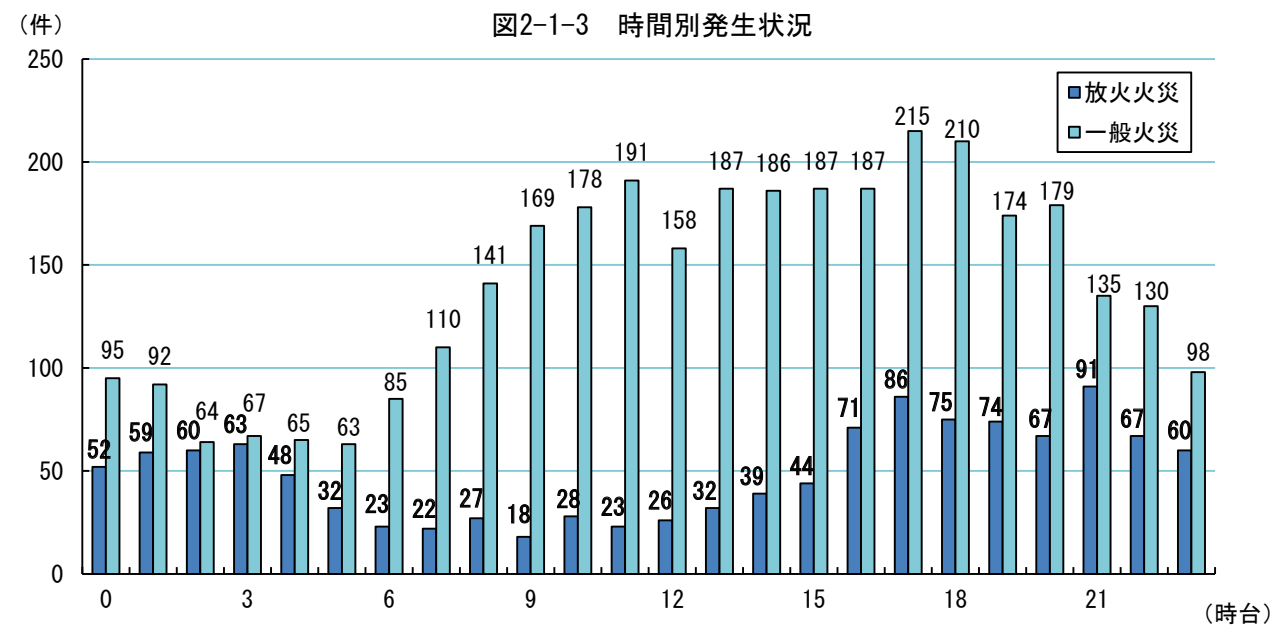


(イ) 時間別発生状況

全火災件数のうち、出火時間が不明の 637 件を除いた 4,553 件の火災について、放火火災と一般火災の時間別発生状況をみたのが図 2-1-3 です。

一般火災は人々が活動する日中に多く発生しているのに対して、放火火災は日中は少なく、日が沈む夕方から人々が睡眠している深夜の時間帯に多く発生しています。

特に 21 時台から 4 時台までの火災件数に対する放火火災の占める割合は高く、4 割近くが放火火災となっています。3 時台が 48.5% で最も高い割合となっています。



事例 深夜時間帯に公園内で放火された火災（１月・東大和市）			
火 災 種 別	その他	出火階・箇所	公園
焼 損 程 度	樹脂製の遊歩道 15m、下草 400 m ² 等焼損		
この火災は、東京都が管理する公園にて、午前２時頃に出火したものです。 近隣に居住する男性が、公園内を自転車で走行していると、池の周りを巡る樹脂製の遊歩道と下草が燃えているのを発見しました。発見者の男性が池の方に近づいていくと、数台のバイクが走り去っていくのを目撃しました。 出火原因は、出火箇所付近からライターやトイレットペーパーのロールが複数見られており、何者かがライターを使用してトイレットペーパーに放火したものと推定されます。			

放火された場所をみると、建物関係で 578 件 (35.6%) 発生しています。このうち最も多い場所は、廊下、玄関ホール、階段などの「共用部分」で 268 件 (46.4%) 発生しており、建物関係の 5 割近くを占めています。次いで、住宅の居室、台所などの「住宅関係」が 90 件 (15.6%)、「車庫・駐車場」が 45 件 (7.8%)、「倉庫・物置」が 44 件 (7.6%)、「空家・工事中建物」が 28 件 (4.8%) などとなっています。

建物関係以外では 1,044 件 (64.4%) 発生し、このうち「敷地内」が 412 件 (39.5%)、「公園・墓地」が 225 件 (21.6%)、「道路・軌道敷」が 120 件 (11.5%) などとなっています。

着火物をみると、本、雑誌、ダンボール等の「紙・紙製品」が 455 件 (28.1%) で、全体の 3 割近くを占めています。

ウ 火災種別ごとの火災件数と損害状況

火災の種別ごとに火災件数と損害状況を一般火災と放火火災で比較したのが表 2-1-3 です。

損害額を火災 1 件あたりでみると、建物火災では、放火火災が 93 万 1 千円、一般火災が 181 万 7 千円、車両火災では、放火火災が 33 万 7 千円、一般火災が 38 万 7 千円、建物及び車両火災以外の火災では放火火災が 2 万 3 千円、一般火災が 76 万 8 千円となっています。

建物火災による死者は、一般火災では 37.6 件に 1 人、放火火災では 58.2 件に 1 人発生しています。

表 2-1-3 火災種別ごとの火災件数と損害状況

火 災 種 別		火 災 件 数	損 害 状 況				
			焼 損 棟 数	焼 損 床 面 積 (㎡)	損 害 額 (千 円)	死 者	負 傷 者
合 計		5,190	3,803	25,674	6,037,529	87	781
建 物	放 火 火 災	640	714	3,699	595,582	11	76
	一 般 火 災	2,629	3,065	21,965	4,777,850	70	660
車 両	放 火 火 災	49	9	10	16,508	-	-
	一 般 火 災	250	4	-	96,847	-	11
上 記 以 外	放 火 火 災	933	6	-	21,309	5	6
	一 般 火 災	689	5	-	529,434	1	28

注 管外からの延焼火災 1 件を除いています。

エ 用途別状況

平成 25 年中の放火火災 1,622 件のうち、建物から出火した火災は 556 件 (34.3%) となっており、その用途別発生状況をみたのが表 2-1-4 です。

放火の対象となった建物を用途別にみると、居住系が 257 件 (46.2%)、事業系が 167 件 (30.0%)、居住・事業系以外が 132 件 (23.7%) となっており、居住系では「共同住宅等」、事業系では「停車場」、「事務所」及び「学校」、居住・事業系以外では「共用部分」及び「付属建物等」で多く発生しています。

表 2-1-4 火元建物用途別発生状況

火 元 の 用 途 (556 件)														
居 住 系			事 業 系								居 住 ・ 事 業 系 以 外			
共 同 住 宅 等	住 宅	複 合 用 途 の 住 宅 部 分	停 車 場	事 務 所	学 校	百 貨 店 ・ 物 販 等	飲 食 店	倉 庫	病 院	そ の 他	共 用 部 分	付 属 建 物 等	空 家 ・ 空 室	工 事 中 の 建 物
196	49	12	14	11	10	8	6	6	4	108	77	32	8	15

(3) 地域別放火火災発生状況

特別区と多摩地区に分けて上位 10 区市をみたのが表 2-1-5 です。

特別区での放火火災の件数を区ごとにみると、100 件以上発生したのは足立区で 119 件となっています。一方多摩地区では、100 件以上発生した市町村はなく、最も多いのは八王子市で 99 件発生しています。

放火による出火率（人口 1 万人あたりの放火件数）をみると、特別区における出火率の平均は 1.2 件、多摩地区における出火率の平均は 1.7 件となっており、件数の多い足立区及び八王子市は 1.8 件となっています。出火率が最も高いのは、特別区では千代田区が 3.3 件、多摩地区では奥多摩町が 5.3 件となっています。

表 2-1-5 地域別放火火災発生状況

特 別 区	件 数	放火による 出 火 率	多 摩 地 区	件 数	放火による 出 火 率
足 立 区	119	1.8	八 王 子 市	99	1.8
江 戸 川 区	109	1.6	町 田 市	46	1.1
葛 飾 区	97	2.2	立 川 市	39	2.2
練 馬 区	86	1.2	日 野 市	35	2.0
大 田 区	83	1.2	武 蔵 村 山 市	30	4.2
北 区	69	2.1	多 摩 市	25	1.7
板 橋 区	60	1.1	昭 島 市	23	2.0
江 東 区	53	1.1	青 梅 市	22	1.6
荒 川 区	44	2.1	府 中 市	19	0.8
世 田 谷 区	39	0.5	東 久 留 米 市	19	1.6

(4) 連続放火火災の発生状況

平成 25 年中の同一日内とその翌日までに、同一地域内で 5 件以上放火された火災の状況を連続放火としてまとめたものが表 2-1-6 です。

平成 25 年中の連続放火火災は 9 回発生し、前年と比べて 2 回減少しています。

連続放火火災の主なものとしては、八王子市で 3 月から 5 月にかけて、合計 4 回 26 件自動販売機に連続して放火されています。

また、ここで連続放火火災として定義したもののほか、長期的に広範囲で繰り返されている放火火災も多く発生しています。

表 2-1-6 主な連続放火火災の発生状況

回 数	月 日	管 内	主 な 出 火 場 所	焼 損 物 件	件 数
1	1 月 24 日	立 川	(立川市) 錦町・柴崎町	ポスター、トイレットペーパー	5
2	2 月 22 日	赤 羽	(北区) 岩淵町	建物全焼 1 棟等	7
3	3 月 13, 14 日	八 王 子	(八王子市) 片倉町	自動販売機	7
4	3 月 18 日	八 王 子	(八王子市) 片倉町・小比企町	自動販売機	6
5	4 月 25 日	八 王 子	(八王子市) 山田町・散田町	自動販売機	5
6	5 月 1、2 日	八 王 子	(八王子市) 上恩方町・犬目町・他	自動販売機	8
7	5 月 24 日	城 東	(江東区) 亀戸	傘、ポスター等	5
8	5 月 27、28 日	石 神 井	(練馬区) 石神井町・南田中・大泉町	車両、ボディカバー等	5
9	12 月 30 日	荒 川	(荒川区) 南千住	チラシ、非常照明等	8

注 本表は、同一日とその翌日までの間で、同一地域に 5 件以上発生した放火火災を集計したものです。

2 たばこ

抽出条件：①発火源分類コード 「42101 たばこ」

②経過分類コード 「911 放火」、「912 無意識放火」、「921 放火の疑い」、「931 火遊び」を除く

- 前年と比べて、たばこによる火災の件数が 28 件増加しました。
- たばこにより建物から出火した火災の 8 割近くが居住系用途から出火しています。
- 寝たばこによる火災は 36 件発生し、4 人の死者と 17 人の負傷者が発生しました。

(1) 火災状況

たばこによる火災は、昭和 28 年から昭和 51 年までは出火原因の第 1 位でしたが、昭和 52 年から放火に次いで多い件数になっています。

平成 25 年中の火災件数は 737 件で、前年と比べて 28 件増加しています。

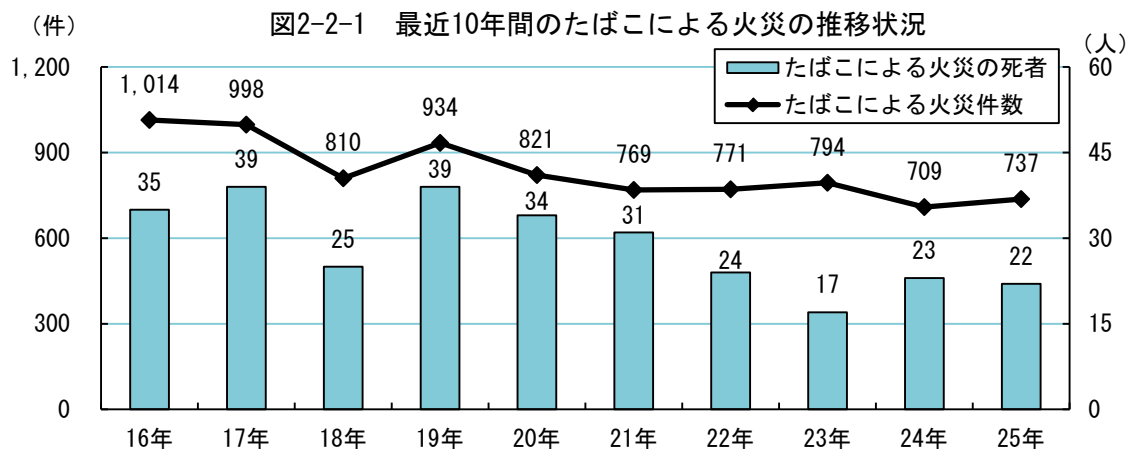
火災種別ごとにみると、前年と比べて建物火災が 30 件、車両火災が 4 件減少していますが、その他の火災は 62 件増加しています。

損害状況をみると、前年と比べて死者は 1 人、負傷者は 18 人減少しており、負傷者数は最近 10 年間で最少となっています（表 2-2-1 参照）。

図 2-2-1 から最近 10 年間のたばこによる火災の推移状況をみると、平成 19 年以降火災件数及び死者数は減少傾向にあり、死者数は最近 10 年間で平成 23 年に次いで少なくなっています。

表 2-2-1 年別火災状況（最近 10 年間）

年 別	火 災 件 数										損 害 状 況				
	合 計	建 物					林 野	車 両	船 舶	そ の 他	焼 損 床 面 積 (㎡)	焼 損 表 面 積 (㎡)	損 害 額 (千円)	死 者	負 傷 者
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や									
16	1,014	562	20	37	161	344	-	21	-	431	5,916	2,045	1,277,451	35	142
17	998	619	21	41	226	331	-	28	-	351	6,589	3,131	1,063,453	39	185
18	810	515	15	27	173	300	1	21	1	272	5,736	1,948	1,264,732	25	174
19	934	589	23	26	184	356	1	21	-	323	6,954	1,955	1,267,779	39	219
20	821	539	13	28	186	312	-	25	-	257	4,754	1,795	1,026,759	34	165
21	769	506	24	22	151	309	-	16	1	246	4,492	1,194	802,407	31	148
22	771	484	10	25	137	312	-	18	-	269	3,096	1,274	626,414	24	127
23	794	461	7	31	120	303	-	14	-	319	3,611	1,466	745,868	17	124
24	709	462	5	27	123	307	-	15	-	232	2,992	1,324	585,057	23	104
25	737	432	3	18	128	283	-	11	-	294	2,664	1,651	513,123	22	86

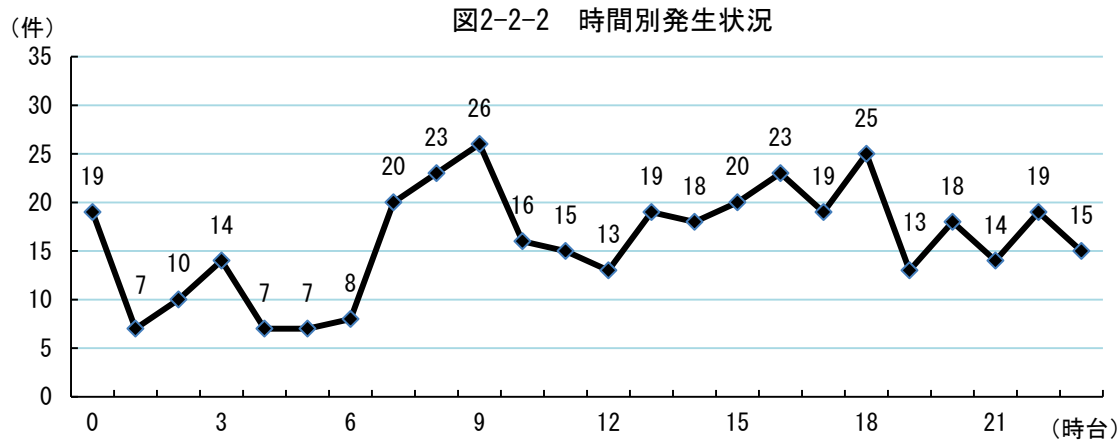


(2) 建物からの発生状況

ア 時間別発生状況

たばこによる火災 737 件のうち、建物から出火した火災は 404 件（54.8％）で、このうち出火時間が判明した 388 件の時間別発生状況をみたのが図 2-2-2 です。

9 時台が 26 件で最も多く発生しており、7 時台から 9 時台までの午前中の各時間帯で 20 件以上の発生となっています。



事例 たばこの火種が敷マットに落下し出火した火災（6月・練馬区）			
火 災 種 別	防火造 3/0 住宅	出火階・箇所	1 階・居室
焼 損 程 度	建物全焼 1 棟、半焼 1 棟、部分焼 2 棟、ぼや 1 棟 計 5 棟 221 m ² 焼損 死者 3 人		
この火災は、住宅の 1 階居室から出火したものです。			
出火原因は居住者（80歳代男性）が就寝前に敷マットに座ってたばこを吸った際、たばこの火種が敷マットに落下したことに気がつかず、就寝してしまったため、敷マットが無炎燃焼を継続し、時間の経過と共に有炎燃焼に至り出火したものです。			
この火災で、住宅に居住する 3 人が就寝中に逃げ遅れて亡くなっています。			

イ 主な建物用途の出火箇所

建物から出火した火災 404 件について、出火した用途と出火箇所をみたのが表 2-2-2 です。

表 2-2-2 出火した用途別の出火箇所

出火箇所	合 計	建 物 用 途											
		居 住 系	事 業 系										居 住 ・ 事 業 系 以 外
			小 計	飲 食 店	事 務 所	物 品 販 売 店 舗	停 車 場	カ ラ オ ケ ボ ッ ク ス 等	ホ テ ル	作 業 場	大 学 ・ 高 等 学 校	そ の 他	
合 計	404	316	62	13	11	8	8	6	2	2	2	10	26
居 室	201	201	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ベ ラ ン ダ	72	66	5	-	2	1	-	-	-	-	-	2	1
キ ッ チ ン 等	19	19	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
便 所	12	8	4	1	-	1	1	-	-	-	1	-	-
車 庫 ・ 駐 車 場	12	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	6
倉庫・物置・廃品置場	11	6	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	4
従業員室・休憩室	11	-	9	2	2	-	-	2	1	-	-	2	2
廊下・踊り場等	9	1	3	-	-	-	2	-	-	-	-	1	5
店 舗 関 係	8	-	8	3	-	3	-	1	-	-	-	1	-
作業場・調理場等	8	-	7	5	1	-	-	-	-	1	-	-	1
玄関・ホール等	8	5	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2
事 務 室	7	-	7	1	5	-	-	-	-	-	-	1	-
建 物 の 外 周 部	4	1	3	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-
そ の 他	22	5	12	-	-	1	4	3	1	1	1	1	5

建物から出火した火災のうち、居住系用途（住宅・共同住宅等）で 316 件（78.2%）、事業系用途（共同住宅等を除く政令用途）で 62 件（15.3%）、居住・事業系以外の用途（複合用途の共用部分、工事中建物等）で 26 件（6.4%）発生しています。

居住系用途は建物から出火した火災の 8 割近くを占めており、このうち、出火箇所は「居室」が 201 件（63.6%）で居住系用途の 6 割以上を占めています。

事業系用途では、「飲食店」が 13 件で最も多く、次いで「事務所」が 11 件、「物品販売店舗」、「停車場」が各 8 件などとなっています。

出火箇所別にみると、「居室」が 201 件で最も多く、次いで「ベランダ」が 72 件、「キッチン等」が 19 件、「便所」及び「車庫・駐車場」が各 12 件などとなっています。

ウ 経過別出火箇所

建物から出火した火災で経過別に出火箇所をみたのが表 2-2-3 です。

経過別では、「不適当な処に捨てる」が 240 件 (59.4%)、「火源が落下する」が 160 件 (39.6%) などとなっており、「不適当な処に捨てる」が 6 割近くを占めています。

「不適当な処に捨てる」は、吸殻で一杯の灰皿等へ火種の残ったたばこを捨てたり、ゴミ箱やゴミ袋へ捨てたことによって火災となったものです。「不適当な処に捨てる」のうち、出火箇所は「居室」が 68 件 (28.3%) で最も多く、次いで「ベランダ」が 66 件 (27.5%)、「キッチン等」が 16 件 (6.7%)、「倉庫・物置・廃品置場」が 11 件 (4.6%) などとなっています。

「火源が落下する」は、喫煙中の火種が布団や紙類等の可燃物上に落下して火災となったものです。布団は綿が使用されているものが多く、一旦布団の上にたばこが落ちると、炎を出さない無炎燃焼を継続し、その後、有炎現象となり出火します。

「火源が落下する」のうち、出火箇所は「居室」が 131 件 (81.9%) で最も多く、全体の 8 割以上を占めています。次いで「ベランダ」が 5 件 (3.1%)、「便所」、「従業員室・休憩室」が各 4 件 (2.5%) などとなっています。

表 2-2-3 経過別出火箇所の状況

経過	合計	出火箇所													
		居室	ベランダ	キッチン等	便所	車庫・駐車場	倉庫・物置・廃品置場	従業員室・休憩室	廊下・踊り場	店舗関係	作業場・調理場等	玄関・ホール等	事務室	建物の外周部	その他
合計	404	201	72	19	12	12	11	11	9	8	8	8	7	4	22
不適当な処に捨てる	240	68	66	16	8	9	11	7	7	8	7	7	6	4	16
火源が落下する	160	131	5	2	4	3	-	4	2	-	1	1	1	-	6
火源が接触する	3	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

エ 経過別の喫煙時の状況

建物から出火した火災のうち、喫煙時の状況が判明した火災は 329 件で、喫煙時の状況をみると、「外出時」が 83 件 (25.2%) で最も多く、次いで「休憩中」が 62 件 (18.8%)、「就寝時」が 59 件 (17.9%) などとなっています。

「外出時」の 83 件について、出火に至る経過をみると、屋外で吸ったたばこの吸殻を路上に無造作に捨てることにより、付近の可燃物に着火して火災になるなどの「不適当な処に捨てる」が 49 件 (59.0%) で 6 割近くを占めています。

表 2-2-4 経過別の喫煙時の状況

経過	合計	喫煙時の状況										
		外出時	休憩中	就寝時	出勤時	起床時	飲酒中	作業中・執務中	帰宅準備中	観覧中・鑑賞中	調理中（炊事中）	その他
合計	329	83	62	59	20	12	11	10	6	4	2	60
不適当な処に捨てる	198	49	44	16	14	8	8	8	5	4	-	42
火源が落下する	128	34	17	42	6	4	3	2	1	-	2	17
火源が接触する	3	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1

オ 出火に至った時間

建物から出火した火災のうち、出火に至った時間が判明した火災は 288 件で、時間経過別に着火物をみたのが表 2-2-5 です。

表 2-2-5 出火に至った時間経過と着火物

出火に至るまでの時間	合計	着火物												
		ごみくず	布団等	紙製品	紙製品	繊維製品	ダンボール	本・雑誌	合成樹脂製品	新聞紙・ちらし	着衣	木製品	木製品	その他
合計	288	118	77	17	15	10	9	6	6	4	3	3	3	17
1 時間未満	179	83	31	10	11	8	6	4	2	3	3	2	1	15
1 時間以上 2 時間未満	55	18	21	3	3	1	1	1	3	-	-	1	2	1
2 時間以上 3 時間未満	27	13	9	3	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
3 時間以上 4 時間未満	17	3	10	-	1	-	1	1	-	1	-	-	-	-
4 時間以上 5 時間未満	4	-	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
5 時間以上 6 時間未満	3	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
6 時間以上	3	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

時間的には、1 時間未満のものが 179 件（62.2%）と最も多く発生しており、6 割以上を占めています。

着火物では、「ごみくず」が最も多く 118 件（41.0%）で、次いで「布団等」の 77 件（26.7%）、「紙製品」の 17 件（5.9%）などとなっています。

カ 行為者の状況

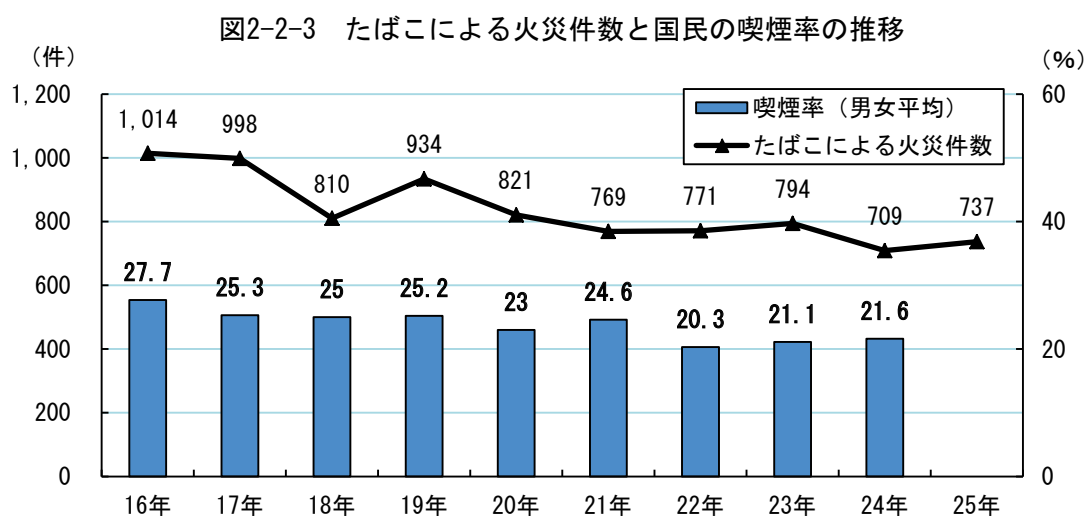
(7) 行為者の男女別・年齢

たばこによる火災件数と国民の喫煙率の推移をみたものが図2-2-3です。

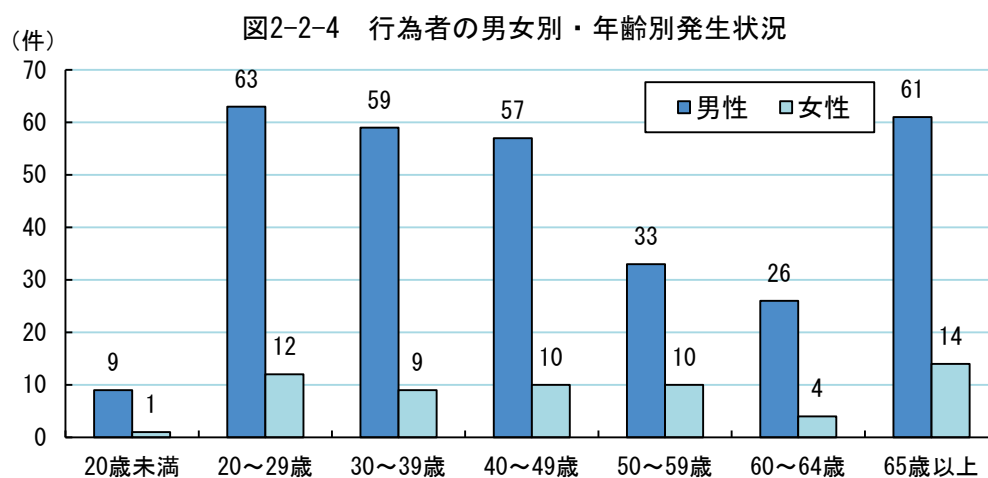
最近10年間の男女喫煙率の平均をみると、平成16年以降、増減を繰り返しながらも減少傾向にあります。

行為者の男女別及び年齢が判明している火災の状況をみたのが図2-2-4です。建物から出火した火災404件のうち、行為者の男女別及び年齢が判明した火災は368件で、男性が308件（83.7%）、女性が60件（16.3%）となっています。

年齢別では20歳代、65歳以上が各75件（20.4%）で最も多く、次いで、30歳代が68件（18.5%）、40歳代が67件（18.2%）などとなっています。



注 喫煙率は厚生労働省国民健康調査より引用（平成25年は未公表）



(4) 寝たばこの状況

ここでいう「寝たばこ」とは、「就寝前若しくは起床時などに関連した状態で、寝具類の中又は上で喫煙し、たばこにより寝具類に着火して出火した火災」をいいます。平成25年中の寝たばこによる火災は36件発生し、4人の死者と17人の負傷者が発生しています。

寝たばこによる火災36件について、年齢区分別行為時の状態をみたのが表2-2-6です。行為者を年齢区分別にみると、65歳以上が12件（33.3%）で最も多く発生しています。死者4人は全て65歳以上の高齢者です。

行為時の状態をみると、飲酒時における火災は10件（27.8%）発生し、寝たばこによる火災の3割近くを占めています。

表 2-2-6 寝たばこの年齢区分別行為時の状態

年 齢 区 分 別	合 計	行 為 時 の 状 態					死 者	負 傷 者
		正 常	飲 酒	薬 物 服 用	そ の 他	不 明		
合 計	36	12	10	4	4	6	4	17
20 歳 未 満	1	1	-	-	-	-	-	-
20 ～ 29 歳	3	1	1	1	-	-	-	3
30 ～ 39 歳	-	-	-	-	-	-	-	-
40 ～ 49 歳	10	1	4	1	3	1	-	5
50 ～ 59 歳	7	2	2	1	1	1	-	5
60 ～ 64 歳	3	1	1	1	-	-	-	1
65 歳 以 上	12	6	2	-	-	4	4	3

(3) 建物以外の発生状況

建物以外から出火した火災で、出火箇所別に着火物をみたのが表2-2-7です。

たばこによる火災737件のうち、建物以外から出火した火災は333件（45.2%）で、前年と比べて66件増加しています。このうち出火箇所を大きく分けてみると、「固有地」が154件（46.2%）と5割近く発生しており、次いで「道路・空地等」が151件（45.3%）、「建物部分」が13件（3.9%）などとなっています。

着火物については、「ごみくず・紙くず等」が143件（42.9%）で4割以上を占めており、次いで、「枯草・落葉・立木等」が68件（20.4%）、「木製品等」が37件（11.1%）、「紙・紙製品」が30件（9.0%）などとなっています。

出火箇所の中で件数が多い「敷地内」と「道路」を合わせた219件のうち、着火物が「ごみくず・紙くず等」の火災は100件（45.7%）で5割近くを占めており、その多くがたばこの投げ捨てによって発生しています。

表 2-2-7 出火箇所別の着火物（建物以外）

出 火 箇 所		合 計	着 火 物							
			ごみくず・紙くず等	枯草・落葉・立木等	木製品等	紙・紙製品	繊維類	合成樹脂製品	木切れ・廃材	その他
合 計		333	143	68	37	30	20	15	8	12
固 有 地	小 計	154	70	22	22	14	3	12	8	3
	敷 地 内	121	56	16	18	11	2	9	7	2
	空 地 ・ 田 畑	16	10	-	1	3	-	2	-	-
	河 川 敷	13	3	5	3	-	-	-	1	1
	軌 道 敷	3	1	-	-	-	1	1	-	-
	森 林	1	-	1	-	-	-	-	-	-
道 路 ・ 空 地 等	小 計	151	62	46	10	14	12	2	-	5
	道路（側溝を含む。）	98	44	23	5	13	11	1	-	1
	公 園	20	11	4	4	1	-	-	-	-
	河 川 敷	12	2	10	-	-	-	-	-	-
	空 地	10	3	4	1	-	-	1	-	1
	軌 道 敷	9	2	3	-	-	1	-	-	3
	墓 地	1	-	1	-	-	-	-	-	-
	共同溝（専用溝含む。）	1	-	1	-	-	-	-	-	-
建 物 部 分	小 計	13	6	-	4	-	-	1	-	2
	屋 上	5	4	-	1	-	-	-	-	-
	建 物 の 外 周 部	3	2	-	1	-	-	-	-	-
	ベ ラ ン ダ 等	3	-	-	1	-	-	-	-	2
	屋 上 工 作 物	2	-	-	1	-	-	1	-	-
車 両	小 計	11	5	-	-	1	5	-	-	-
	荷 台	4	2	-	-	1	1	-	-	-
	原 動 機 付 自 転 車	4	2	-	-	-	2	-	-	-
	助 手 席	2	1	-	-	-	1	-	-	-
	運 転 席 （ 車 両 等 ）	1	-	-	-	-	1	-	-	-
工 作 物	小 計	4	-	-	1	1	-	-	-	2
	電 柱 等	2	-	-	-	1	-	-	-	1
	橋	1	-	-	1	-	-	-	-	-
	門	1	-	-	-	-	-	-	-	1

3 火遊び

- ライターによる火遊びが半数近く占めています。
- 建物以外の場所で6割以上が発生しています。

抽出条件：経過分類コード 「931 火遊び」

(1) 火災状況

ここでとりあげる「火遊び」とは、行為者が14歳未満の者で、遊びを目的として出火させた火災をいいます。

なお、玩具用花火で遊戯中に火出したものは、含んでいません。

ア 年別火災状況

最近10年間の年別火災状況をみたのが表2-3-1です。

平成25年中の火遊びによる火災は74件で、前年と比べて24件減少しており、死者、負傷者ともに減少しています。

表2-3-1 年別火災状況（最近10年間）

年 別	火災発生件数								焼 損 床 面 積 (㎡)	焼 損 表 面 積 (㎡)	損 害 (千円) 額	死 者	負 傷 者
	合 計	建 物					車 両	そ の 他					
		合 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や							
16	220	71	1	6	10	54	－	149	484	182	113,044	－	43
17	163	57	2	3	15	37	－	106	582	182	192,989	1	28
18	152	68	3	－	20	45	3	81	750	171	130,366	－	34
19	130	48	1	4	17	26	－	82	472	240	89,614	3	42
20	168	62	－	2	15	45	3	103	225	324	69,379	2	30
21	153	47	2	2	7	36	3	103	254	13	45,860	－	19
22	115	41	－	－	6	35	3	71	93	73	24,068	2	17
23	109	42	－	2	10	30	1	66	246	82	51,075	－	22
24	98	34	1	1	3	29	1	63	152	12	7,132	2	12
25	74	25	－	2	4	19	－	49	205	89	55,238	－	10

イ 月別発生状況

月別の火災状況をみると、12月が11件（14.9%）で最も多く、次いで3月、11月が各9件（12.2%）などとなっています。

ウ 時間別の発生状況

出火時間が不明の火災3件を除く71件について、時間別に発生状況をみると、14時台から17時台にかけて43件（60.6%）発生しており、全体の6割以上を占めています。

(2) 出火箇所

発火源別に出火箇所をみたものが表 2-3-2 です。

出火箇所をみると、建物関係の箇所から出火した火災 25 件では、居室から出火したものが 9 件（36.0%）と最も多く、次いで「ベランダ」の 3 件（12.0%）などとなっており、ごみくず等にライターやマッチなどを用いて火遊びをしています。

建物関係以外の箇所から出火した火災 49 件では、「敷地内」と「公園」が各 17 件（34.7%）などとなっており、落葉や新聞紙、チラシなどが着火物となっています。

発火源では、「ライター」が 18 件（36.7%）と最も多く、次いで「マッチ」が 9 件（18.4%）などとなっています。

表 2-3-2 発火源別出火箇所

発火源	合 計	出火箇所													
		建物関係（主として建物の箇所）								建物関係以外（主として建物以外の箇所）					
		居 室	ベ ラ ン ダ	物 置	廃 品 置 場・ ごみ 捨 て 場	押 入	玄 関	廊 下	そ の 他	敷 地 内	公 園	河 川 敷	屋 外 ご み 捨 て 場	屋 上	そ の 他
合 計	74	9	3	2	2	1	1	1	6	17	17	6	1	1	7
ラ イ タ ー	34	6	1	2	2	1	1	-	3	8	4	1	1	1	3
マ ッ チ	13	2	1	-	-	-	-	1	-	3	3	2	-	-	1
ロ ウ ソ ク	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
火のついた紙	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
火のついた棒	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
不 明	24	-	-	-	-	-	-	-	3	6	10	3	-	-	2

(3) 子供に対するライターの安全対策

消費生活用製品安全法施行令の一部改正により、平成 23 年 9 月 27 日以降、使い捨てライター等は、幼児の誤使用を防ぐチャイルドレジスタンス機構（CR）を備えないライターや幼児が興味を引くようなおもちゃ型のライター（ノベルティライター）は販売できなくなりました。

技術基準に適合しているライターについてはPSCマークの表示が義務付けられており、このようなライターが普及していくことで、今後ライターの火遊びによる火災の減少が期待されています。

ア ライターの火遊びによる火災の発生状況

最近 5 年間のライターの火遊びによる火災発生状況をみたのが表 2-3-3 です。

平成 25 年中のライターの火遊びによる火災は 34 件で、前年と比べて 3 件増加しました。

また、火遊びに占める割合をみると、5 割近く（45.9%）を占めています。

火遊びによる死者は最近5年間で4人発生しており、全てライターによる火遊びが原因となっています。

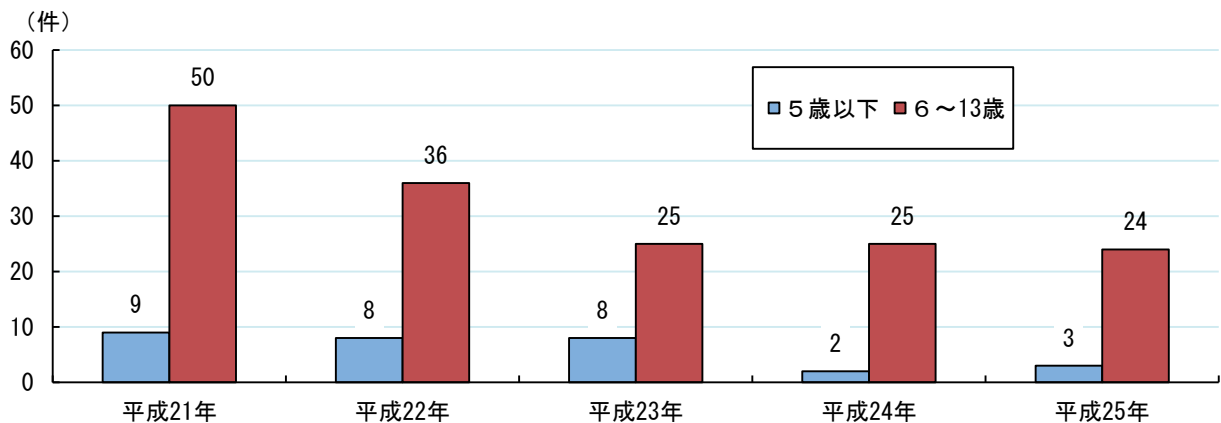
ライターの火遊びによる火災件数の推移を行為者の年齢別（年齢不明を除く。）にみたのが図2-3-1です。

平成25年中は、6～13歳の行為者による火災は24件で、前年と比べて1件減少しました。5歳以下の行為者では3件で、前年と比べ1件増加しています。

表 2-3-3 ライターの火遊びによる火災状況

年 別	合 計	割 合 （ ％ ）	火 災 件 数							損 害 状 況				
			建 物					車 両	そ の 他	焼 損 床 面 積 （ ㎡ ）	焼 損 表 面 積 （ ㎡ ）	損 害 額 （ 千 円 ）	死 者	負 傷 者
			小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や							
平成21年	75	49.0	31	1	2	7	21	2	42	163	13	28,102	-	18
平成22年	54	47.0	25	-	-	5	20	2	27	93	71	23,803	2	16
平成23年	43	39.4	21	-	-	9	12	1	21	193	81	42,008	-	16
平成24年	31	31.6	14	1	-	2	11	-	17	112	7	4,009	2	9
平成25年	34	45.9	16	-	2	3	11	-	18	205	88	55,139	-	8

図2-3-1 ライターの火遊びによる火災の行為者年齢別件数の推移（年齢不明を除く。）



事例 ライターの火遊びにより出火した火災（8月・品川区）			
構造・用途等	防火造 2/0 住宅	出火階・箇所	2階・居室
焼 損 程 度	建物半焼 1 棟 30 m ² 焼損 負傷者 2 名		
この火災は、火元者の次男（5歳）が自宅にあったライターで火遊びをしている際に、2階の居室内にあった布団に着火し出火したものです。			
自宅1階にいた母親が次男を含む子供4人を屋外へ避難させましたが、母親と次男が重傷を負っています。			

4 ライター

- 火災件数は前年と比べて増加しました。
- 何らかの要因で、誤ってスイッチが入り出火した火災が最も多く発生しています。

抽出条件：①発火源分類コード 「42301 ライター」

②経過分類コード 「911 放火」、「912 無意識放火」、「921 放火の疑い」、「931 火遊び」を除く。

(1) 火災状況

ここでとりあげる「ライター」による火災とは、発火源が「ライター」で、放火及び火遊びによる火災を除いたものをいいます。

ア 年別火災状況

最近 10 年間の年別火災状況をみたのが表 2-4-1 です。

平成 25 年中のライターによる火災は 47 件発生しています。

火災種別ごとにみると、建物火災は 27 件（57.4%）で、前年と比べて 2 件減少しており、最近 10 年間で最少の件数となっています。車両火災は 16 件（34.0%）で、前年と比べて 6 件増加しています。

表 2-4-1 年別火災状況（最近 10 年間）

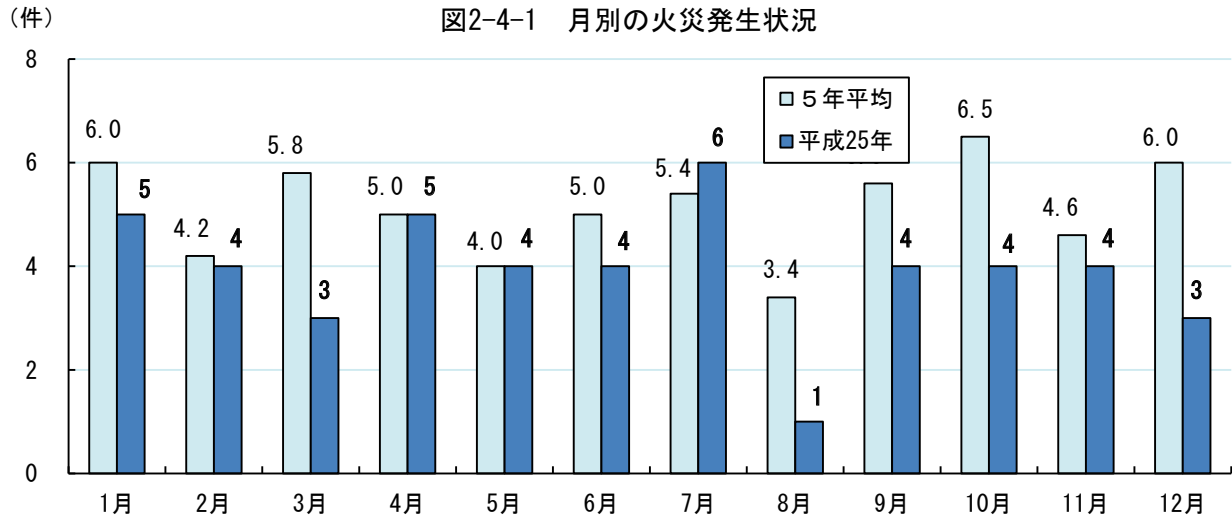
年 別	火 災 件 数									損 害 状 況				
	合 計	建 物					車 両	航 空 機	そ の 他	焼 損 床 面 積 (m^2)	焼 損 表 面 積 (m^2)	損 害 額 (千円)	死 者	負 傷 者
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や								
16	77	37	-	-	5	32	35	-	5	298	108	109,774	1	44
17	62	32	1	3	3	25	24	1	5	304	17	54,217	1	30
18	63	41	-	1	7	33	18	-	4	100	90	23,848	1	27
19	74	38	-	1	2	35	30	-	6	56	5	24,211	2	19
20	68	42	2	-	8	32	22	-	4	322	111	60,133	2	21
21	74	45	-	1	9	35	24	-	5	239	95	36,584	1	20
22	74	36	1	1	2	32	34	-	4	239	103	54,254	1	22
23	65	40	1	2	6	31	21	-	4	311	128	114,122	-	38
24	41	29	-	-	4	25	10	-	2	17	14	3,156	1	21
25	47	27	-	3	1	23	16	-	4	178	87	32,234	1	20

イ 月別火災状況

ライターによる火災を月別にみたのが図 2-4-1 です。平成 25 年中は 7 月が最も多い 6 件（12.8%）の発生となっています。最近 5 年間の月別平均件数では、10 月が 6.5 件と最も多く、次いで 1 月と 12 月が各 6.0 件となっています。

1 月、12 月は、年末年始にあたるため、大掃除や荷物整理をする機会が多くなることから、

整理中に戸の開け閉めや荷物の移動によって誤ってライターのスイッチが入り出火するケースや、ごみとして捨てられたライターが塵芥車の回転板に巻き込まれた際にスイッチが入り出火するケースなどがあることから、ライターの保管や廃棄の際は取扱いに注意する必要があります。



(2) 経過別出火箇所区分

平成25年中のライターによる火災の状況を経過別出火箇所区分でみたのが表2-4-2です。

経過別では、気付かないうちに物や戸などでライターのスイッチが押されてしまったことにより出火した「誤ってスイッチが入る」が最多の18件（38.3%）で4割近くを占めており、次いで「引火する」が12件（25.5%）などとなっています。

「誤ってスイッチが入る」の出火箇所区分をみると、建物から出火した火災が7件（38.9%）、車両から出火した火災が11件（61.1%）発生しており、6割以上が車両から出火した火災となっています。

表2-4-2 経過別出火箇所区分の状況

出火箇所区分		合 計	経過別				
			誤って スイッチ が入る	引火 する	す火 源が 接触 する	接 炎 する	そ の 他
合計		47	18	12	8	6	3
建物	小計	27	7	6	7	5	2
	建物（自宅）	17	3	4	5	3	2
	建物（事業用の部分）	8	4	1	2	1	-
	建物（その他の部分）	2	-	1	-	1	-
建物以外	小計	20	11	6	1	1	1
	車両からの出火	16	11	4	1	-	-
	屋外で出火	4	-	2	-	1	1

5 花 火

抽出条件：①発火源分類コード 「71201 煙火」、「71202 花火」

②経過分類コード 「911 放火」、「912 無意識放火」、「921 放火の疑い」、「931 火遊び」を除く。

- 花火による火災の7割以上が6月から8月にかけて発生しました。
- 行為者の9割以上が未成年者でした。

(1) 火災状況

ここでとりあげる「花火」とは、発火源が煙火（以下「専門花火」という。）及び玩具煙火（以下「おもちゃ花火」という。）の両方の火災をいいます。

夏の風物詩として日本人に親しまれる花火ですが、使用方法を誤ると火災や受傷の原因になることから、子供に対して安全な取扱いや遊び方を指導する必要があります。

ア 年別火災状況

最近10年間の年別火災状況をみたのが表2-5-1です。

平成25年中の花火による火災は21件で、前年と比べて5件減少しており、最近10年間の平均件数（33件）よりも少なくなっています。

なお、平成25年中の花火による火災は、19件がおもちゃ花火による火災で、2件が専門花火による火災となっています。

また、最近10年間に於いて花火による火災の死者は発生していません。

火災種別ごとにみると、その他の火災が20件（95.2%）、船舶火災が1件（4.8%）となっています。船舶火災は、川岸から打ち上げられたロケット花火が屋形船の客席に入り出火したものです。

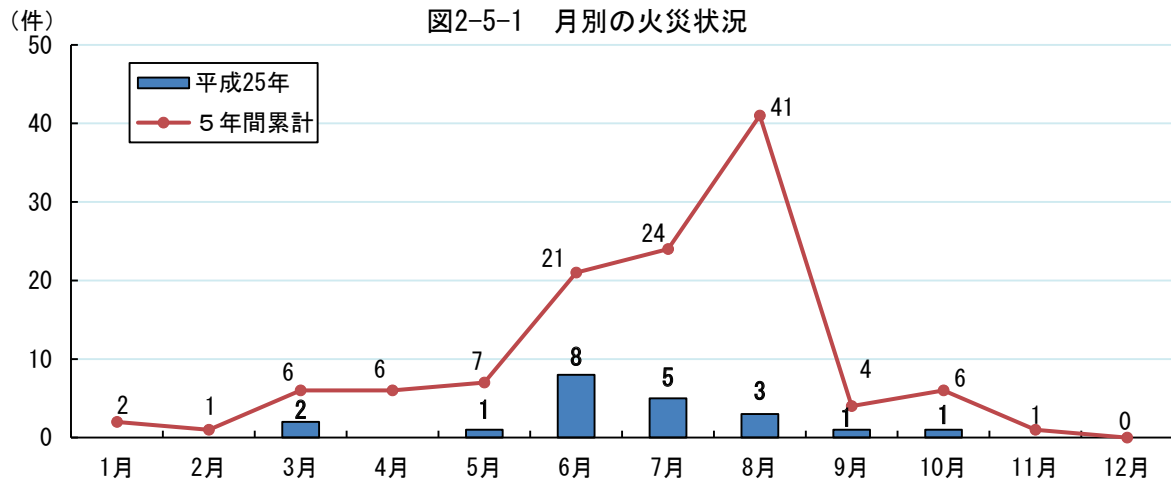
表2-5-1 年別火災状況（最近10年間）

年 別	火 災 件 数										損 害 状 況				
	合 計	建 物					車 両	船 舶	林 野	そ の 他	焼 損 床 面 積 (m^2)	焼 損 表 面 積 (m^2)	損 害 額 (千円)	死 者	負 傷 者
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や									
16	60	5	-	1	1	3	-	-	-	55	50	3	9,834	-	5
17	48	4	1	-	-	3	1	-	1	42	247	-	11,035	-	3
18	34(1)	4(1)	-	-	-	4(1)	1	1	-	28	-	-	1,041	-	3
19	34	5	-	-	3	2	-	-	1	28	-	28	104	-	1
20	34	-	-	-	-	-	1	-	-	33	-	-	9	-	-
21	21(1)	3	-	-	-	3	-	-	-	18(1)	-	-	173	-	2
22	26	4	-	-	-	4	-	-	-	22	-	-	71	-	1
23	25	1	-	-	-	1	-	-	-	24	-	-	69	-	3
24	26	2	-	-	-	2	-	-	1	23	-	-	80	-	-
25	21(2)	-	-	-	-	-	-	1	-	20(2)	-	-	3	-	4

注 () 内の数値は専門花火の件数を内数で計上しています。

イ 月別発生状況

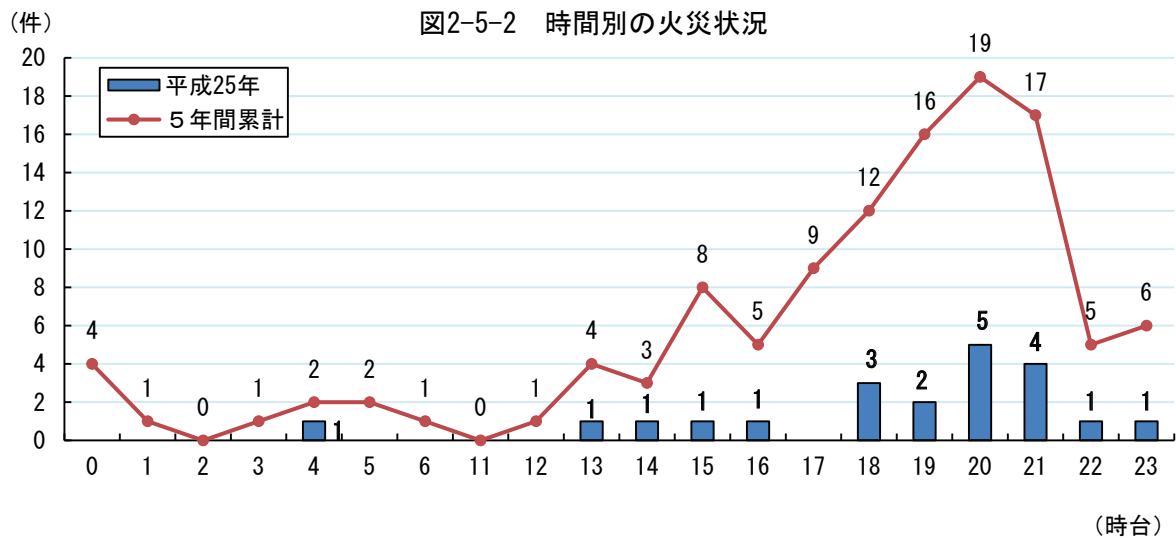
最近5年間の花火による火災119件の月別発生状況を図2-5-1からみると、花火による火災は例年6月から8月にかけて集中する傾向にあり、最近5年間で86件（72.3%）発生し、平成25年中もこの期間で16件（76.2%）の発生となっています。



ウ 時間別発生状況

最近5年間の花火による火災で出火時間が不明の3件を除く116件の時間別発生状況を、図2-5-2からみると、19時台から21時台で52件（44.8%）と他の時間帯に比べ多く発生しています。

また、この時間帯の件数を平成25年中に限ってみても、21件中11件（52.4%）と5割以上発生しています。



(2) 行為者と火災状況

花火は火の粉が飛び散ったり、花火自体が飛しょうするため、花火を行う場所と火災の発生する場所が異なることがあり、行為者を特定することが困難な状況です。

最近5年間の花火による火災で行為者が判明したのは48件で、平成25年中は10件でした。

ここでは、花火による火災で行為者が判明した最近5年間の48件についてみていきます。

表 2-5-2 行為者の年齢区分と出火箇所

年 齢 区 分	出 火 箇 所											
	合 計	建物関係 (主として 建物の 箇所)		建物関係以外 (主として建物以外の箇所)								
		建物の 外周部	ベ ラ ン ダ	河 川 敷	敷 地 内	公 園	道 路	空 地	屋 外 駐 車 場	屋 外 物 品 置 場	墓 地	客 席 (船 舶)
合 計	48	1	1	20	10	6	3	3	1	1	1	1
13歳以下	13	-	1	3	5	1	2	-	1	-	-	-
14～19歳	31	1	-	16	4	5	-	3	-	1	1	-
20歳以上	4	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	1

花火による火災の行為者を年齢区分と出火箇所別にみたのが表 2-5-2 です。

出火箇所で見ると、建物関係以外の箇所からの出火が46件(95.8%)と10割近くを占めています。

13歳以下の行為者をみると、火災は13件(27.1%)発生しています。出火時間では、19時台と20時台で各5件の発生などとなっています。出火箇所をみると、敷地内が最多の5件(38.5%)で、次いで河川敷の3件(23.1%)などとなっています。

14歳から19歳以下の行為者をみると、火災は31件(64.6%)発生しています。出火時間では、20時台と21時台で各7件の発生などとなっています。出火箇所をみると、河川敷が最多の16件(51.6%)で5割以上を占め、次いで公園の5件(16.1%)などとなっています。

さらに20歳以上の行為者をみると、火災は4件(8.3%)発生し、時間別では、21時台が2件、19時台と0時台で各1件発生しており、出火箇所をみると、道路、河川敷、敷地内、客席(船舶)で各1件(25.0%)となっています。

6 電気設備機器

- 電気機器、電気装置、配線・配線器具等がそれぞれ前年と比べて増加しました。
- トラッキング火災が、前年と比べて増加しました。

抽出条件：①発火源分類コード 大分類コード「1 電気を使用する道具・装置」
 ②経過分類コード「911 放火」、「912 無意識放火」、「921 放火の疑い」、「931 火遊び」を除く。
 ③車両から出火した火災の区分コード「0 非該当」

(1) 火災状況

平成 25 年中の全火災件数（管外からの延焼火災 1 件を除く、以下同じ。）は 5,190 件で、前年と比べて 102 件増加していますが、電気設備機器火災件数は 1,111 件で、前年と比べて 2 件増加しています。全火災件数に対する割合は 21.4% になり、前年に次いで高い割合になっており 2 割を超えています。

表 2-6-1 年別火災状況（最近 10 年間）

年 別	全 火 災 件 数	火 電 気 災 設 備 機 器 件 数	全 火 災 に 対 す る 割 合 (%)	火 災 件 数								損 害 状 況					
				建 物					航 空 機	車 両	船 舶	そ の 他	焼 損 床 面 (㎡) 積	焼 損 表 面 (㎡) 積	損 害 (千 円) 額	死 者 (人)	負 傷 者 (人)
				小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や									
16	6,746	1,011	15.0	846	39	40	159	608	-	1	-	164	12,130	3,828	2,395,921	12	208
17	6,373	1,004	15.8	887	35	30	171	651	-	2	-	115	7,761	3,558	1,476,139	21	226
18	5,912	1,050	17.8	925	36	54	195	640	-	-	-	125	11,300	4,733	2,546,934	25	284
19	5,796	994	17.1	899	23	37	174	665	-	-	1	94	6,469	3,157	1,576,704	28	242
20	5,762	1,074	18.6	965	37	36	172	720	-	1	-	108	10,900	4,280	2,299,446	22	225
21	5,598	1,004	17.9	896	26	28	138	704	-	-	1	107	5,431	2,107	1,410,553	21	186
22	5,086	997	19.6	892	19	28	157	688	-	-	-	105	6,465	3,005	1,269,575	23	194
23	5,340	1,051	19.7	933	18	26	139	750	-	-	1	117	4,774	2,345	931,142	12	172
24	5,088	1,109	21.8	992	19	35	119	819	1	-	-	116	5,506	1,589	1,353,856	18	159
25	5,190	1,111	21.4	984	20	28	129	807	-	-	-	127	7,221	3,570	2,052,526	21	155

注 全火災件数は、治外法権火災及び管外からの延焼火災を除いています。

なお、車両本体から出火した電気火災は、「第 6 章 13 車両」において分析していますので参照してください。

発 火 源	合 計	1,111	225	199	109	86	68	55	46	39	33	30	26	26	21	19	14	12	11	8	8	54	22	不
電 熱 器	計	222	6	16	64	5	1	26	-	1	3	21	4	12	18	4	3	6	6	-	1	21	4	-
電 気 ス ト ー ブ	79	-	-	-	58	1	-	-	-	-	-	-	2	-	5	-	1	3	1	-	-	7	2	-
電 気 ク ッ キ ン グ ヒ ー タ	24	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12	-	-	6	1	3	1	-	-	-	1	-	-
電 気 溶 接 器	14	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	10	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
電 気 こ ん ろ り	11	-	1	3	-	-	1	-	-	-	-	4	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
投 込 湯 沸 器	11	-	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	3	-	-
電 気 ト ー ス タ	8	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-
電 気 こ た つ	5	-	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カ ー ペ ッ ト 類	5	-	-	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ヘ ア ー ド ラ イ ヤ	5	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
電 気 焼 鳥 器	4	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-
電 気 フ ラ イ ヤ	4	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
そ の 他 の 電 熱 器	52	6	8	1	1	-	12	-	-	3	1	1	2	4	3	-	2	2	5	7	4	20	9	-
小 計	374	36	77	45	25	32	29	2	13	11	9	3	14	3	14	10	6	5	7	4	20	9	-	-
電 子 レ ン ジ	29	-	-	-	1	-	13	-	-	3	-	-	-	-	2	9	-	-	-	-	-	1	-	-
冷 暖 房 機	18	3	7	-	2	3	1	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カ ー ボ ン ヒ ー タ	18	-	-	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	2	1	-
電 磁 調 理 器	16	1	-	-	1	-	3	-	1	-	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
白 熱 球	16	1	2	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
電 気 冷 蔵 庫	13	3	4	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	1	-
コ ン ピ ュ ー タ (本 体)	11	2	2	-	3	-	-	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
白 熱 灯 ス タ ン ド	10	-	3	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-
研 磨 機 (グ ラ イ ン ダ 含 む)	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ダ ウ ン ラ イ ト	9	1	-	5	-	-	-	-	1	1	-	-												

(2) 主な出火原因

電気設備機器を、発火源別に電熱器、電気機器、電気装置、配線等及び配線器具等に分類したものが表 2-6-2 です。

ア 電熱器

電熱器関係の火災は 222 件(20.0%)で、前年と比べて 18 件減少しています。

電熱器の中で火災件数が最も多いのは、電気ストーブが 79 件(35.6%)で、次いで電気クッキングヒータが 24 件(10.8%)、電気溶接器が 14 件(6.3%)などとなっており、この 3 種類の機器で電熱器の 52.7%と 5 割以上を占めています。

電気ストーブの火災は 79 件で、前年と比べて 2 件減少していますが、電熱器の中で火災発生件数が一番多い状況です。これは、取扱いや維持管理が容易であること、スイッチを入れるとすぐに暖まり、化石燃料を使用しないため空気を汚さない、給油の手間がかからないなどのクリーンなイメージから、手軽な暖房器具として広く使用されていることが一つの要因です。

また、電気ストーブは他の暖房器具に比べ安価であり、手軽に活用している方が増えていることも要因として挙げられます。経過をみると「可燃物が接触する」の 58 件のうち、布団類などが接触して出火する火災が 31 件で 53.4%を占めています。その他の可燃物は、衣類や紙類などとなっています。

電気クッキングヒータの火災は、24 件で前年と比べて 4 件減少しています。経過をみると、「放置する・忘れる」が 12 件(50.0%)、次いで「誤ってスイッチが入る（入れる）」が 6 件(25.0%)、「考え違いにより使用を誤る」が 3 件(12.5%)などとなっています。「考え違いにより使用を誤る」は、誤って電気ポットを電気クッキングヒータにかけて出火したものなどです。

電気溶接器の火災は 14 件で、前年と比べて 2 件減少しています。経過で最も多いのは、「火花が飛ぶ」で 10 件(71.4%)発生しています。その 10 件中 5 件が工事中の建物内や作業場で電気溶接器使用中に発生しています。

事例 1 電気ストーブに掛け布団が接触して出火した火災（1 月・葛飾区）			
構造・用途等	準耐火造 3/0 住宅	出火階・箇所	3 階・居室
焼 損 程 度	建物ぼや 掛け布団、電気ストーブ各若干焼損		
この火災は、住宅の 3 階居室から出火したものです。 出火原因は、就寝中の娘の部屋に入った母親が、寒いだろうと電気ストーブのスイッチを入れて居室を出ましたが、起床した娘は電気ストーブのスイッチが入っていることに気付かずに掛け布団をまくったために、掛け布団が電気ストーブに接触し、1 時間 30 分後に出火しました。 母親が 1 階の居室にいと、住宅用火災警報器の警報音がしたため確認に行くと、娘の部屋から煙が出ており、電気ストーブに被さった掛け布団から炎が上がっているのを発見し、自分の携帯電話で 119 番通報したあと、洗面器に汲んだ水道水をかけて消火しました。			

イ 電気機器

電気機器関係の火災件数は、374 件 (33.7%) で前年と比べて 32 件増加しています。

電気機器の中で火災件数が最も多いのは、蛍光灯の 44 件 (11.8%) で、次いで電子レンジが 29 件 (7.8%)、冷暖房機及びカーボンヒータが各 18 件 (4.8%) などとなっています。

蛍光灯の火災は、44 件で前年と比べて 8 件増加しています。経過で最も多いのは、「電線が短絡する」で 16 件 (36.4%) となっています。

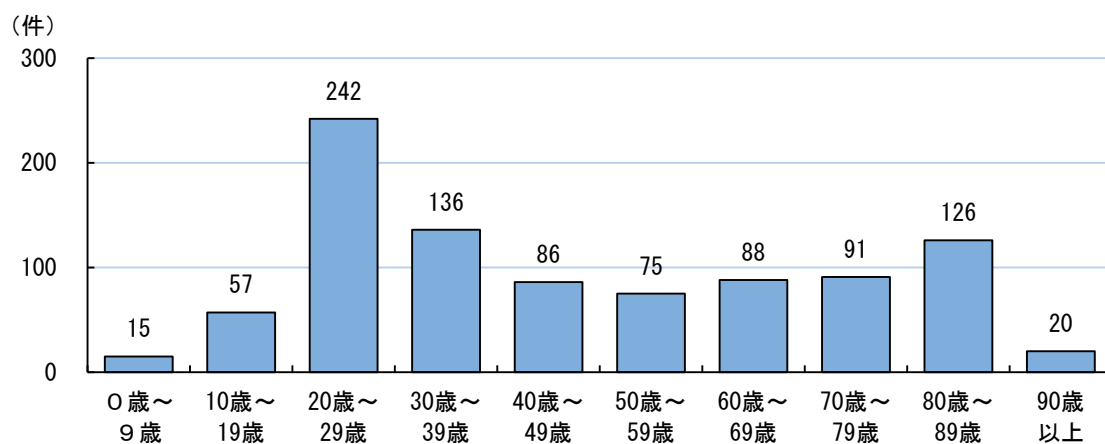
電子レンジの火災は、29 件で前年と比べて 7 件増加しています。その経過は「過熱する」が 13 件 (44.8%) で調理時間の設定を間違えて長時間加熱したものや、「考え違いにより使用を誤る」が 9 件 (31.0%) で包装袋がアルミ蒸着された食品を加熱してしまったことにより発生しています。

カーボンヒータの火災は 18 件で前年と比べて 7 件減少しています。その経過は「可燃物が接触する」が 13 件 (72.2%) で布団類などが接触して出火する火災が 8 件で 61.5% を占めています。その他の可燃物は、衣類や紙類などとなっています。カーボンヒータは電気ストーブと外観上の見分けがつきにくい形状ですが、火災調査上ではそれぞれ決められた発火源ごとに統計・分析を行っています。

「電気ストーブからの火災」は、電気ストーブ、カーボンヒータ、ハロゲンヒータ、温風機を含めたもの（以下「電気ストーブからの火災」という。）をいいます。

最近 10 年間の「電気ストーブからの火災」を行為者の年齢別にみたものが図 2-6-2 です。

図 2-6-1 「電気ストーブからの火災」の行為者年齢別発生状況（最近 10 年間）



※ 行為者年齢不明191人を除く。

行為者を年齢別にみると、20 歳代が最も多く 242 人 (25.9%) となっています。電気ストーブ、カーボンヒータ、ハロゲンヒータ、温風機は、化石燃料を使用する機器と比べると安価であり、学生などの若者が手軽に使用しているようです。これらは炎が出ないため、火災の意識が低く、使用したまま就寝して寝返りなどで布団が接触して火災に至る事案が多く発生しています。

ウ 電気装置

電気装置関係の火災件数は、72 件(6.5%)で前年と比べて 21 件増加しています。

電気装置の中で火災件数が最も多いのは、コンデンサ（低圧）が 24 件（33.3%）で、次いで三相モータが 11 件（15.3%）、トランスが 7 件(9.7%)、制御盤及び配電用変圧器が各 6 件(8.3%)などとなっています。

コンデンサ（低圧）の火災は、24 件で前年と比べて 14 件増加しています。その経過をみると、「絶縁劣化により発熱する」が 22 件、「金属の接触部が過熱する」及び「電線が短絡する」が各 1 件となっています。コンデンサ（低圧）から出火する火災は例年、梅雨の季節から暑さが続く 9 月にかけて多発し、出火原因のほとんどが永年使用による絶縁劣化により発熱、出火しています。この季節は気温が高いことからコンデンサ本体の温度もさらに上昇し、絶縁劣化が進み火災の発生が多くなっています。

エ 配線等・配線器具等

配線等・配線器具等の火災は、合わせて 438 件(39.4%)で前年と比べて 33 件増加しています。

経過をみると、「金属の接触部が過熱する」が 176 件（40.2%、前年比 35 件増加）、「電線が短絡する」が 89 件（20.3%、同 10 件減少）、「トラッキング」が 54 件（12.3%、同 6 件増加）などとなっています。

発火源別にみると配線等の火災は 241 件（55.0%）発生し、このうち屋内線及びコードが各 46 件（19.1%）で、経過の内訳は「電線が短絡する」が屋内線で 21 件（45.7%）、コードで 28 件（60.9%）、「金属の接触部が過熱する」が屋内線で 11 件（23.9%）、コードで 8 件（17.4%）などとなっています。

配線器具等の火災は 197 件（45.0%）発生し、このうち差込みプラグが 69 件（35.0%）で、経過の内訳は「トラッキング」が 24 件（34.8%）などとなっています。コンセントは 66 件（33.5%）発生し、経過の内訳は「金属の接触部が過熱する」が 54 件（81.8%）などとなっています。テーブルタップは 22 件（11.2%）発生し、経過の内訳は「トラッキング」が 8 件（36.4%）、「金属の接触部が過熱する」が 6 件（27.3%）などとなっています。

事例 2 コードリールのコードを延長しないで使用して出火した火災（8 月・板橋区）			
構 造 ・ 用 途 等	耐火造 3/1 病院	出 火 階 ・ 箇 所	地下 1 階・機械室
焼 損 程 度	建物ぼや コードリール焼損		
この火災は、病院の地下 1 階機械室で使用していたコードリールから出火したものです。 出火原因は、コードリールのコードを延長しないでスポットエアコン（10.6A）を長時間使用していたため、過電流により発生した熱がコードに蓄積され出火したものです。コードを巻いた状態での許容電流は 5 A でした。 病院職員 A が地下 1 階で勤務していると、放送設備から「火災が発生しました。」との放送がありました。1 階で勤務していた病院職員 B が自動火災報知設備の受信盤を確認すると地下 1 階を示していたので病院職員 A に連絡し、病院職員 A が機械室を確認すると、コードリールから煙が出ていたので、バケツに水道水を汲んで消火しました。 自動火災報知設備の鳴動とともに有人直接通報により消防機関に通報されました。			

オ 電気機器の部位別の火災状況

電気機器関係の火災 374 件の主な出火部位をみたのが表 2-6-3 です。以下、それぞれについてみていきます。

表 2-6-3 主な電気機器の出火部位

発火源	合計	電源コード	ヒータ部	安定器	基板部	差込みプラグ	庫内部	器具内配線	充電部	コンデンサ部	送風用モータ	その他の電気器具部分	その他・不明
合計	374	39	37	29	28	27	21	21	15	11	10	88	48
蛍光灯	44	5	-	21	3	2	-	3	-	2	-	7	1
電子レンジ	29	1	-	-	-	-	20	1	-	-	-	1	6
冷暖房機	18	3	-	-	3	2	-	1	-	-	3	3	3
カーボンヒータ	18	-	18	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
電磁調理器	16	1	8	-	-	1	-	-	-	1	-	2	3
白熱電球	16	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	14	-
電気冷蔵庫	13	4	-	-	-	1	-	2	-	1	-	1	4
コンピュータ（本体）	11	-	-	-	6	2	-	-	2	-	-	1	-
白熱灯スタンド	10	3	-	-	-	2	-	-	-	-	-	5	-
研磨機（グラインダ含む）	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	6
ダウンライト	9	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	6	1
冷蔵ショーケース	8	3	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3	1
LED	8	2	-	-	4	-	-	1	-	-	-	1	-
その他	164	17	11	8	12	15	1	11	12	7	7	40	23

(7) その他の電気器具部分

その他の電気器具部分から出火した火災は、88 件（23.5%）発生しています。その他の電気器具部分とは、発火源部位の項目に該当していない部分を示し、例えば、白熱電球のガラス球部分や蛍光灯の蛍光管部分などがあります。88 件のうち、白熱電球が 14 件（15.9%）発生し、このうちタオルや衣類等が接触する「可燃物が接触する」が 11 件（78.6%）発生しています。続いて蛍光灯が 7 件（8.0%）発生し、このうち「金属の接触部が過熱する」が 4 件（57.1%）発生しています。

(イ) 電源コード

電源コード部分から出火した火災は、39 件（10.4%）発生しています。

電源コード部分から出火した火災の主な要因は、物に踏まれたり折れ曲がった状態で使用されていたためにコードの被覆が損傷したり、長年使用したことによる経年劣化により、短絡や半断線が発生して火災となるケースが大半を占めています。

(ウ) ヒータ部

ヒータ部から出火した火災は、37 件 (9.9%) 発生しています。

カーボンヒータから出火した火災が 18 件 (48.6%) で、経過別にみると洗濯物や衣類等が接触する「可燃物が接触する」が 13 件 (72.2%) 発生しています。続いて電磁調理器が 8 件 (21.6%) で、経過別にみると調理中に電源を入れたまま別の部屋で作業をするなどの「放置する・忘れる」が 7 件 (87.5%) などとなっています。

カ トラッキング

最近 5 年間のトラッキング現象による火災の年別発生状況は表 2-6-4 のとおりです。

平成 25 年中のトラッキング現象による火災は 86 件で、前年と比べて 16 件増加しています。このうち差込みプラグ（器具の差込みプラグを含む。）の差し刃間での火災は、32 件 (37.2%) で前年と比べて 3 件減少しています。

差込みプラグのトラッキング現象による火災は、差し刃間の絶縁物上に湿気を含む塵埃などが付着した状態で電圧が印加されると、沿面電流が流れ、小規模な放電が発生し、この放電による火花により絶縁物表面に導電性のあるグラファイトが生じて、火災に至ります。

差込みプラグ差し刃間のトラッキング現象による火災を防止するためには、「①差込みプラグは常時差したままにせず、使用時以外は抜いておく。②長期間差したままのプラグは定期的に点検するとともに乾いた布などで清掃し、発熱等の異常がある場合は交換する。特に埃や湿気の多い環境下で使われているものや、家具等の陰に隠れているものには細心の注意を払う。」などの対応が必要です。

表 2-6-4 年別発生状況（最近 5 年間）

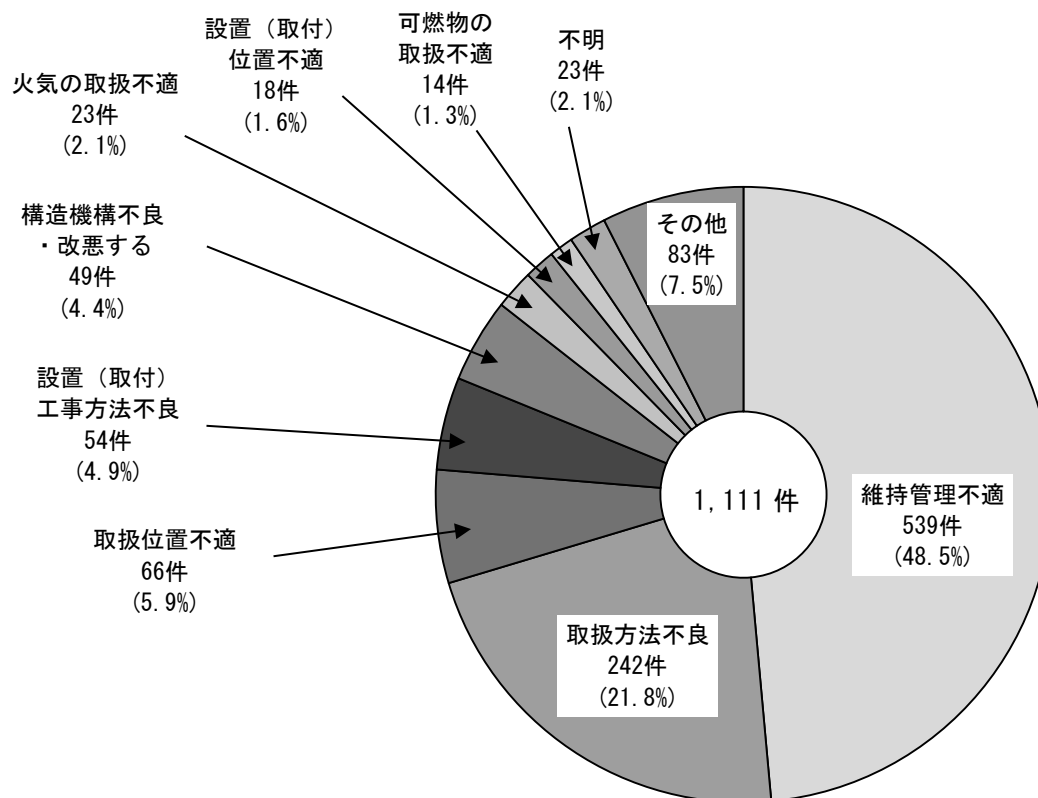
年 別	電気火災件数	トラッキング火災件数 (電気火災に占める割合%)	差込みプラグ差し刃間の トラッキング火災件数
21	1,004	66 (6.6)	36
22	997	75 (7.5)	30
23	1,051	79 (7.5)	35
24	1,109	70 (6.3)	35
25	1,110	86 (7.7)	32

注 差込みプラグの差し刃間の火災件数は、発火源が配線器具の差込みプラグ、電気設備機器のうち発火源部位が差込みプラグの合計です。

(3) 出火要因別発生状況

電気設備機器関係の火災の出火要因について図 2-6-2 をみると、「維持管理不適」が最も多く 539 件 (48.5%) となっており、「取扱方法不良」が 242 件 (21.8%)、「取扱位置不適」が 66 件 (5.9%)、「設置 (取付) 工事方法不良」が 54 件 (4.9%) などとなっています。

図 2-6-2 出火要因別状況



7 ガス設備機器

- 厨房関連設備機器の火災が9割以上を占めています。
- 4割近くは「火気の取扱不適」（天ぷら油火災など）で発生しています。

抽出条件：①発火源分類コード 中分類コード「21 都市ガス」、「22 プロパンガス」
 ②経過分類コード 「911 放火」、「912 無意識放火」、「921 放火の疑い」、「931 火遊び」を除く。
 ③車両から出火した火災の区分コード 「0 非該当」

(1) 火災状況

ここでとりあげる「ガス設備機器」の火災とは、都市ガス及びプロパンガスを燃料とする設備機器が発火源となった火災をいいます。

最近10年間の年別火災状況は表2-7-1のとおりです。

平成25年中の火災件数は631件で前年と比べて15件減少しています。平成17年から平成20年には800件台でしたが、平成21年には700件台に減少し、平成22年からは600件台を減少傾向で推移しています。

平成25年中は例年と同様に天ぷら油に起因する火災の占める割合が高く、使用者の放置や消し忘れなどに起因しています。「天ぷら油火災」については、別に「第3章1 天ぷら油火災」で詳細に分析しています。

表2-7-1 年別火災状況（最近10年間）

年 別	全 火 災 件 数	火 ガ ス 災 件 数	火 災 に 対 す る 割 合 (%)	火 災 件 数							損 害 状 況					
				建 物					車 両	船 舶	そ の 他	焼 損 床 面 積 (㎡)	焼 損 表 面 積 (㎡)	損 害 額 (千円)	死 者 (人)	負 傷 者 (人)
				小 計	全 焼	半 焼	部 焼 分	ぼ や								
16	6,746	769	11.4	745	14	20	146	565	1	-	23	3,524	1,842	735,642	8	344
17	6,373	827	13.0	808	14	24	164	606	-	1	18	4,630	2,220	851,664	9	368
18	5,912	822	13.9	800	13	18	145	624	-	-	22	3,262	1,993	616,726	2	334
19	5,796	825	14.2	803	19	16	141	627	-	-	22	3,647	1,412	913,781	14	359
20	5,762	824	14.3	806	11	11	165	619	-	-	18	2,226	1,899	481,542	12	350
21	5,598	769	13.7	748	12	13	113	610	-	1	20	2,556	1,638	470,373	14	319
22	5,086	668	13.1	653	9	9	114	521	-	1	14	1,711	929	415,018	4	289
23	5,340	647	12.1	631	10	12	95	514	-	-	16	2,038	986	451,650	5	263
24	5,088	646	12.7	634	6	18	101	509	-	-	12	1,746	1,006	428,610	12	232
25	5,190	631	12.2	620	11	7	93	509	-	-	11	1,719	737	293,474	7	231

注 全火災件数は、治外法権火災及び管外からの延焼火災を除いています。

(2) 主な出火原因

主なガス設備機器別の発火源と経過を表したのが表2-7-2です。厨房関連機器の火災は600件で、ガス設備機器の火災件数の95.1%を占めています。家事・季節関連機器の火災は17件、工業関連機器の火災は14件となっています。以下、主な設備機器ごとの出火原因についてみていきます。

ア 厨房関連設備機器

厨房関連設備機器の火災は 600 件（95.1%）発生し、「ガステーブル」、「大型ガスこんろ」、「ガスこんろ」、「簡易型ガスこんろ」、「大型レンジ」及び「ガスレンジ」と上位 6 件までがこんろ部を有する調理器具で、合計 550 件（91.7%）となります。

出火の経過をみると、「放置する・忘れる」が 314 件（52.3%）で、厨房関連設備機器の火災の 5 割以上を占めています。「放置する・忘れる」の発火源をみると、「ガステーブル」が 178 件（56.7%）、「大型ガスコンロ」が 68 件（21.7%）、「ガスコンロ」が 23 件（7.3%）、「大型レンジ」が 18 件（5.7%）などとなっています。

この他の経過には、廃棄のため、エアゾール缶に穴を開けた際、噴出したＬＰＧなどに「引火する」及びガス設備機器の周囲に置かれた布巾などの「可燃物が接触する」が各 50 件（8.3％）などとなっています。

表 2-7-2 ガス設備機器の発火源と経過

[illegible]

イ 家事・季節関連設備機器

家事・季節関連設備機器の火災は 17 件（2.7％）発生しています。内訳は、「ガストーブ」が 5 件（29.4％）で最も多く、次いで「ガスファンヒータ」及び「風呂がま」が各 4 件（23.5％）などとなっています。経過別にみると「引火する」が 8 件（47.1％）で、次いで「可燃物が接触する」が 6 件（35.3％）などとなっています。

事例 1 ガスファンヒータのホース接続方法を誤ったためガス漏れした火災（10 月・府中市）			
構造・用途等	防火造 2/0 複合用途（診療所・住宅）	出火階・箇所	1 階・台所
焼 損 程 度	建物ぼや 内壁若干焼損 負傷者 1 人		
この火災は、住宅の 1 階台所から出火したものです。 出火原因は、都市ガス用ガスファンヒータに規格の異なる L P G 用の絹巻きラセン管を接続したため、ガスホース接続口のガスホースが緩み、この箇所から都市ガスが漏えいしたことにより引火したものです。なお、火源については、物的証拠がなく不明としています。 近隣診療所の院長が外へ出て歩いていると、爆発音と白煙が上がったのを発見し、急いで診療所に戻り、診療所の電話で 119 番通報しました。 初期消火は行われていません。なお、爆発時、台所に火元者の妻（80 歳代女性）がおり、顔面、両手、気道に熱傷を負いました。			

ウ 工業関連設備機器

工業関連設備機器の火災は 14 件（2.2％）発生しています。内訳は、「ガス切断器」が 7 件（50.0％）で最も多く、次いで「ガスバーナ」が 6 件（42.9％）などとなっており、経過別にみると「火花が飛ぶ」が 5 件（35.7％）、「接炎する」が 4 件（28.6％）などとなっています。

(3) 出火要因別発生状況

出火要因別発生状況を表したものが表 2-7-3 です。以下、要因別にみていきます。

ア 火気の取扱い

「火気の取扱不適」は 243 件で、全体の 38.5％となっています。内訳は、「ガステーブル」が 127 件（52.3％）、「大型ガスこんろ」が 58 件（23.9％）などとなっています。これらのほとんどが、天ぷら油火災によるものです。

家庭や飲食店に限らず、揚げ物調理中にその場を離れないなど、火気の取扱いに十分注意し、住宅用火災警報器などの設置・維持管理を行い、万一に備えることが必要です。

事例 2 天ぷら油を加熱中、その場を離れたために出火した火災（10 月・西東京市）			
構造・用途等	防火造 2/0 複合用途（飲食店・共同住宅）	出火階・箇所	2 階・台所
焼 損 程 度	建物ぼや レンジフード、排気ダクト等焼損		
この火災は、複合用途建物の 2 階共同住宅部分の台所から出火したものです。 出火原因は、火元者（20 歳代男性）がガステーブルでフライドポテトを調理するためにフライパンに天ぷら油を入れて加熱中に、その場を離れてトイレに行ったため天ぷら油が過熱し出火したものです。 火元者がトイレから戻ると、フライパンから炎が上がっているのを発見し、水道から水を汲んでかけたため炎が拡大し、自動火災報知設備のベルが鳴動しました。 1 階店舗の従業員は、火元者から火災を知らされて 119 番通報しました。			

表 2-7-3 ガス設備機器の出火要因

発火源		合 計	火 気 の 取 扱 不 適	取 扱 方 法 不 良	維 持 管 理 不 適	可 燃 物 の 取 扱 不 適	取 扱 位 置 不 適	設 置 (取付) 位置不 適	構 造 機 構 不 良・改 悪する	設 置 (取付) 工事方 法不良	可 燃 物 の 貯 蔵 不 適	そ の 他	不 明
合 計		631	243	239	54	44	29	5	2	1	1	8	5
厨 房 関 連	小 計	600	241	227	52	38	24	4	1	1	1	7	4
	ガステーブル	321	127	144	13	19	7	2	-	-	1	6	2
	大型ガスこんろ	102	58	25	8	3	7	-	-	1	-	-	-
	ガスこんろ	42	19	15	-	3	5	-	-	-	-	-	-
	簡易型ガスこんろ	36	8	13	1	8	4	-	1	-	-	-	1
	大型レンジ	30	17	7	3	1	1	1	-	-	-	-	-
	ガスレンジ	19	8	9	1	-	-	-	-	-	-	-	1
	無煙ガ스로ースタ	9	-	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-
	瞬間湯沸器	7	-	-	4	3	-	-	-	-	-	-	-
	給湯器	6	-	1	3	1	-	-	-	-	-	1	-
	ガス鉄板焼器	4	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	フライヤ	4	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	ガス炊飯器	3	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-
	ゆで麺機	3	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-
	その他	14	-	10	3	-	-	1	-	-	-	-	-
家事・季節 関連	小 計	17	-	3	1	6	3	1	1	-	-	1	1
	ガスストーブ	5	-	1	-	1	2	-	-	-	-	1	-
	ガスファンヒータ	4	-	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-
	風呂がま	4	-	-	-	3	-	1	-	-	-	-	-
	ガス衣類乾燥機	3	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1
	簡易型ガスストーブ	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
工業 関連	小 計	14	2	9	1	-	2	-	-	-	-	-	-
	ガス切断器	7	1	4	-	-	2	-	-	-	-	-	-
	ガスバーナ	6	1	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	ガスハンドトーチ	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-

イ 取扱方法

「取扱方法不良」の火災は 239 件で、全体の 37.9%となっています。内訳は、「ガステーブル」が 144 件（60.3%）、「大型ガスこんろ」が 25 件（10.5%）などとなっています。

火災へ至る経過として、ガステーブル等を使用中に食材が「過熱する」、周囲の可燃物に「接炎する」、こんろ部とグリル部のスイッチを間違えて「誤ってスイッチが入る（入れる）」などにより発生しています。

ウ 維持管理

「維持管理不適」の火災は 54 件で、全体の 8.6%となっています。内訳は、「ガステーブル」が 13 件（24.1%）、「無煙ガスロースタ」が 9 件（16.7%）発生し、清掃不良により付着した油かすに着火したものや、火の付いた油などが吸い込まれ、ダクト内の油かすに着火して出火したものが多く発生しています。

エ 可燃物の取扱い

「可燃物の取扱不適」の火災は 44 件で、全体の 7.0%となっています。内訳は、「ガステーブル」が 19 件（43.2%）、「簡易型ガスこんろ」が 8 件（18.2%）、「大型ガスこんろ」、「ガスこんろ」、「瞬間湯沸器」、「風呂がま」が各 3 件（6.8%）発生しています。特に、エアゾール缶や簡易型ガスこんろ用燃料ボンベの L P G に引火した火災が発生し、ガス設備機器を使用中に害虫に向け殺虫剤を噴射したり、廃棄のための穴開けにより残っていた L P G が噴出して引火し出火しています。エアゾール缶や簡易型ガスこんろ用燃料ボンベは、可燃性ガスが充填されていることから十分注意しなければなりません。

オ 取扱位置

「取扱位置不適」の火災は 29 件で、全体の 4.6%となっています。内訳は、「ガステーブル」、「大型ガスこんろ」が各 7 件（24.1%）、次いで「ガスこんろ」が 5 件（17.2%）、「簡易型ガスこんろ」が 4 件（13.8%）などとなっています。特に、着衣の袖口や布巾などの繊維製品などが、こんろの炎に接触してしまったため出火した火災が発生しています。

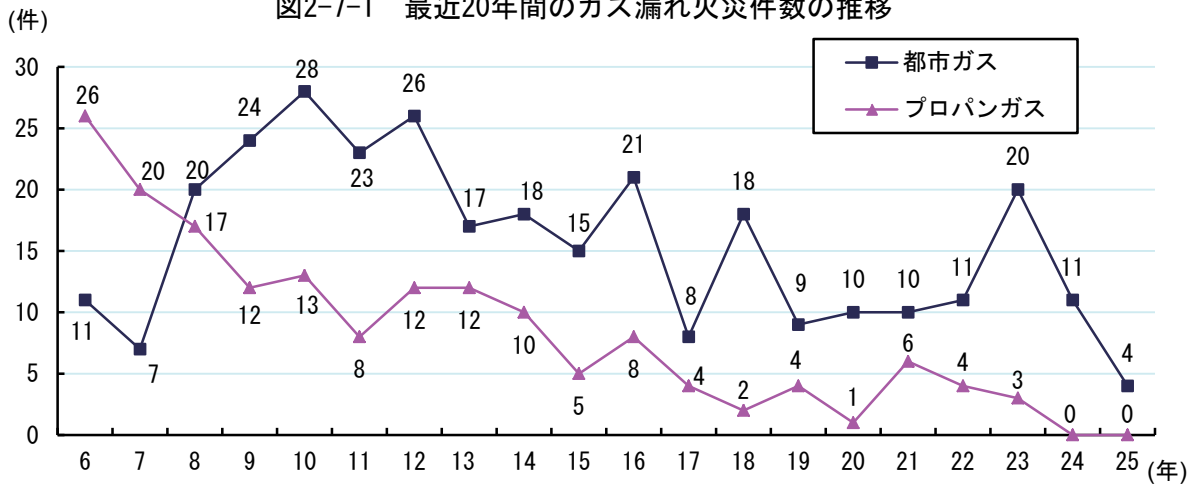
また、ガス溶接器など工業関連設備機器は、バーナの炎や溶接の際に飛び散った火花が可燃物に着火しています。

これらの機器を使用する場合は、周囲の可燃物と十分な間隔を保って取り扱うことが必要です。

事例3 解体工事現場でガス切断器の火花が落葉に着火し出火した火災（2月・町田市）			
火災種別	その他	出火階・箇所	敷地内
焼損物件	電気配線被覆、ケーブルカバー焼損		
この火災は、建物解体工事中に出火したものです。			
出火原因は、工事作業員がガス切断器を使用して鉄骨を切断中に発生した火花が敷地内に敷設されたケーブルカバー下の落葉に着火し出火しました。			
作業員が切断作業中、切断箇所下の養生用防災シートが赤く見えたので、防災シートを取り除くと電線被覆が燃えているのを発見し、用意していた水バケツで消火しました。			
その後、近隣消防署へ出向いて火災の事実を知らせました。			

[illegible]

図2-7-1 最近20年間のガス漏れ火災件数の推移



イ 要因別の状況

平成 25 年中のガス漏れ火災のガス漏れ要因をみたものが表 2-7-5 で、ガスホースの「元栓への差込み不良」、「ゴム管（老化・接触）」、「屋内配管の腐食」が各 1 件（25.0%）などとなっています。

表 2-7-5 ガス漏れ要因の状況

ガス 種 別	発 火 源	ガス 漏 れ 器 具	合 計	差 元 込 み へ の 良 の	（ゴ ム 管 の 老 化 ・ 接 触 ）	腐 屋 内 配 管 食 の	そ の 他
合	計		4	1	1	1	1
都 市 ガ ス	ガステーブル	ガステーブル	1	1	-	-	-
	瞬間湯沸器	瞬間湯沸器	1	-	-	-	1
	ゆで麺機	屋内配管	1	-	-	1	-
	ガスバーナ	ガスバーナ	1	-	1	-	-

注 平成 25 年中は、プロパンガスによるガス漏れ火災はありませんでした。

8 石油設備機器

- 火災件数、焼損床面積が前年と比べて増加しました。
- 工事関連機器の火災が前年と比べて増加しました。

抽出条件：①発火源分類コード 中分類コード「23 油を燃料とする道具装置」

②経過分類コード「911 放火」、「912 無意識放火」、「921 放火の疑い」、「931 火遊び」を除く。

③車両から出火した火災の区分コード 「0 非該当」

(1) 火災状況

ここでとりあげる「石油設備機器」の火災とは、石油を燃料とする設備機器が発火源となった火災をいいます。

ア 年別火災状況

最近 10 年間の年別火災状況は表 2-8-1 のとおりです。

平成 25 年中の石油設備機器による火災は 54 件で、前年と比べて 10 件増加し、最近 10 年間では増減を繰り返しています。

火災による死者は 2 人、負傷者は 30 人となっています。

火災種別をみると、建物火災が 46 件（85.2%）となっており、延焼拡大率（建物火災件数に占める部分焼以上の火災の割合）は 45.7%で、前年に比べて 23.2 ポイント増加しています。建物火災全体の火災件数 3,269 件の延焼拡大率が 23.9%であることから、石油設備機器の火災は延焼拡大危険が高いといえます。

表 2-8-1 年別火災状況（最近 10 年間）

年 別	全 火 災 件 数	火 石 油 設 備 機 器 の 件 数	全 火 災 に 対 す る 割 合 (%)	災 件 数									損 害 状 況				
				建 物					航 空 機	車 両	船 舶	そ の 他	焼 損 床 面 積 (㎡)	焼 損 表 面 積 (㎡)	損 害 (千 円) 額	死 者 (人)	負 傷 者 (人)
				小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や									
16	6,746	74	1.1	64	9	8	8	39	1	-	-	9	1,513	303	222,747	2	41
17	6,373	69	1.1	58	10	5	12	31	-	1	-	10	1,550	570	264,014	3	49
18	5,912	70	1.2	63	11	5	15	32	-	-	-	7	1,759	199	276,523	4	38
19	5,796	55	0.9	48	8	3	7	30	1	-	-	6	835	303	756,995	1	30
20	5,762	56	1.0	48	6	4	13	25	-	-	1	7	1,138	492	168,718	3	55
21	5,598	58	1.0	48	9	3	11	25	-	-	1	9	1,261	377	175,561	5	35
22	5,086	30	0.6	27	6	2	4	15	-	-	-	3	665	177	87,475	2	21
23	5,340	47	0.9	40	4	4	9	23	-	-	-	7	735	1,199	146,227	2	25
24	5,088	44	0.9	40	3	1	5	31	-	-	-	4	530	119	42,716	1	25
25	5,190	54	1.0	46	10	1	10	25	1	-	-	7	1,051	264	106,019	2	30

注 全火災件数は、治外法権火災及び管外からの延焼火災を除いています。

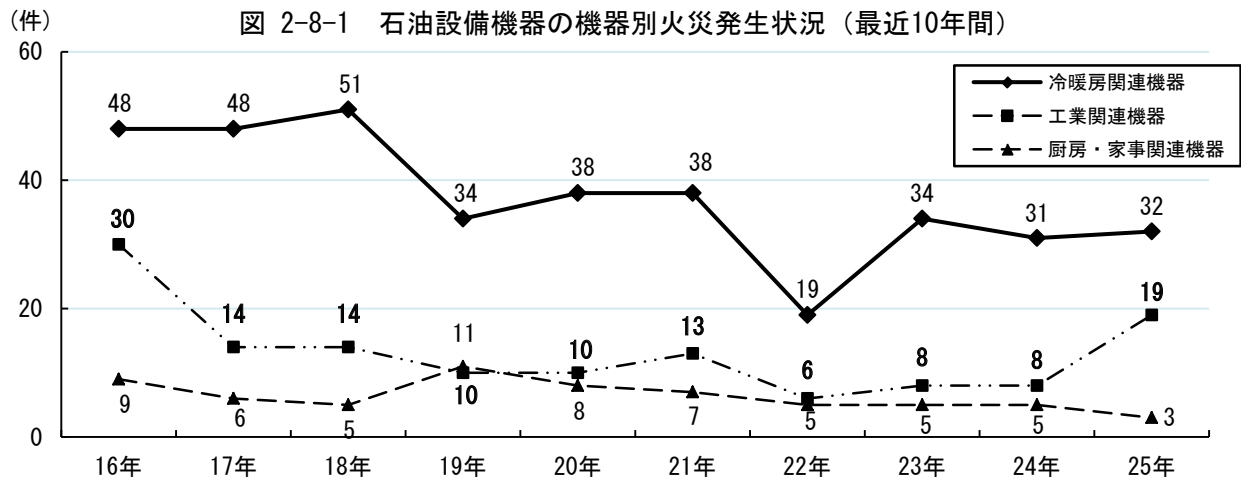
イ 機器別火災状況

石油設備機器のうち、機器別による火災件数の推移をみたものが図 2-8-1 です。冷暖房関連機器は 32 件、工業関連機器は 19 件、厨房・家事関連機器は 3 件発生しています。

冷暖房関連機器の火災は、平成 16 年から平成 18 年までは 50 件前後を推移し、平成 19 年からは、平成 22 年を除き 30 件台で推移しています。

工業関連機器の火災は、平成 16 年から平成 24 年までは、減少傾向を示していますが、平成 25 年には平成 24 年の 2 倍以上の 19 件発生しています。

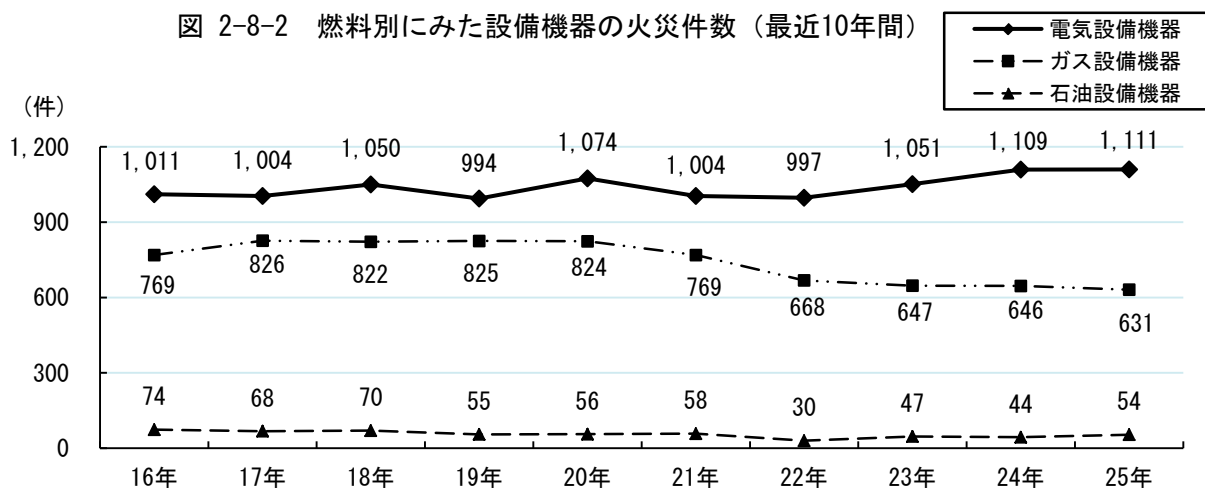
厨房・家事関連機器の火災は、最近 10 年間で最も少ない 3 件となっています。



注 放火、火遊び及び車両から出火した火災を除いています。

ウ 燃料別設備機器火災状況

最近 10 年間の電気、ガス及び石油設備機器別の火災件数を比較したものが図 2-8-2 です。平成 25 年中は、前年と比べて電気設備機器は 2 件、石油設備機器は 10 件増加していますが、ガス設備機器は 15 件減少しています。



注 放火、火遊び及び車両から出火した火災を除いています。

(2) 主な出火原因

石油設備機器の火災とその発生経過をみたものが表 2-8-2 です。

表 2-8-2 石油設備機器別の出火に至った経過

発火源		合計	引火する	接炎する	使用中給油する	可燃物が落下する	可燃物を置く	可燃物が接触する	火源が接触する	吹き返す	その他	不明
合計		54	14	5	5	4	4	3	3	3	11	2
関連機器 冷暖房	小計	32	13	-	5	3	3	1	1	1	3	2
	石油ストーブ	28	10	-	5	3	3	1	1	1	3	1
	石油ファンヒーター	4	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1
工業関連機器	小計	19	1	5	-	-	1	1	2	2	7	-
	石油バーナ	4	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-
	内燃機関	3	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-
	工業用炉	3	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
	トーチランプ	3	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-
	ボイラ	2	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
	エンジンカタ	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
	路面加熱機	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	加熱試験器	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	ごみ焼却炉	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
関連機器 厨房・家事	小計	3	-	-	-	1	-	1	-	-	1	-
	石油こんろ	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
	アルコールランプ	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	風呂がま	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-

ア 石油ストーブ

石油ストーブの火災は 28 件（51.9%）で前年と比べて 2 件増加しており、石油設備機器の火災の 5 割以上を占めています。

出火原因をみると、そばに置いたエアゾール缶が破裂して漏れた L P G に着火する等の「引火する」が 10 件、火を消さないで給油を行う「使用中給油する」が 5 件、干していた洗濯物が風などによりストーブ上に落下する「可燃物が落下する」及び天板に本・紙類などを置く「可燃物を置く」が各 3 件などとなっています。

イ 石油バーナ

石油バーナの火災は4件（7.4％）発生しています。出火原因をみると、草焼きなどで石油バーナを使用した際に、炎が揺らいだりして枯草付近の板張りの壁に炎が接触して出火した「接炎する」が3件、石油バーナを使用した際にバーナが立木や可燃物に接触して出火した「火源が接触する」が1件となっています。

事例	石油バーナでトウモロコシ収穫後の幹を焼却中に出火した火災（8月・国分寺市）		
構造・用途等	木造 2/0 住宅	出火階・箇所	畑地
焼 損 程 度	建物ぼや 雨どい若干、立木 1 本焼損		
この火災は、畑地においてトウモロコシ収穫後の幹を集めて石油バーナで焼却中、ブロック塀を隔てた住宅敷地内の立木にバーナの炎が接触して出火したものです。 手伝いをしていた行為者の妹Aは、火災発見後に大声で行為者に知らせ、近隣住民と一緒にバケツリレーで消火をしました。 妹Aと同じ場所にいた行為者の妹Bは、行為者から依頼され、119 番通報しました。			

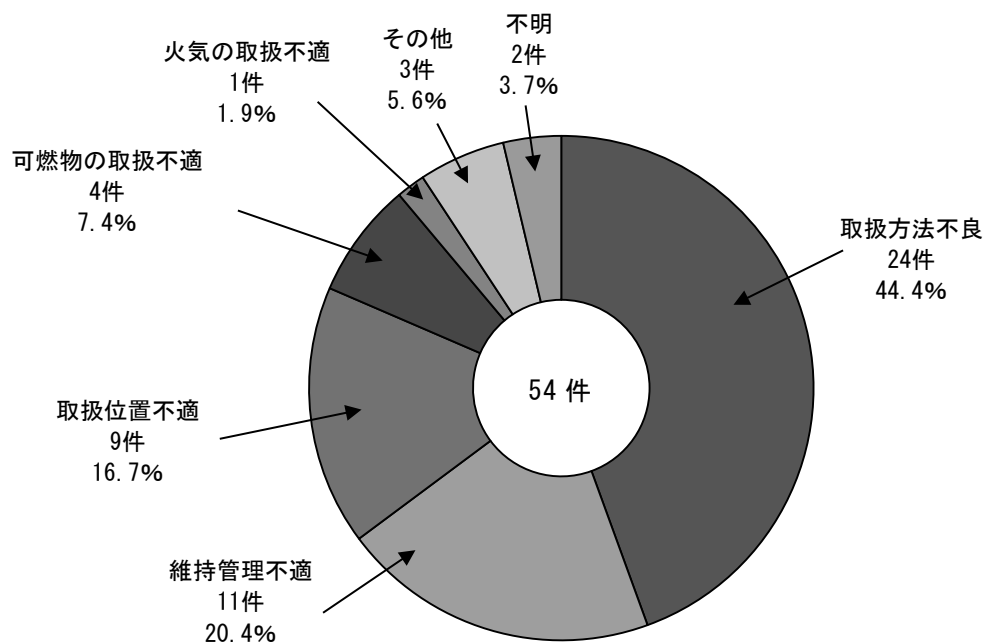
ウ トーチランプ

トーチランプの火災は3件（5.6％）発生しています。ここでいうトーチランプとは、降雪時に軌道敷のポイントレールの融雪に使用する機器のことをいいます。冬季でも降雪時でなければ使用せず、設定時にホースとカプラの接続が緩んでいたため燃料が漏れ、漏れた燃料に着火した火災や煤が付着していたために、異常燃焼を起こしたところに周囲の可燃物が接触した火災などがあります。

(3) 出火要因別発生状況

石油設備機器の出火要因別状況を表したものが図 2-8-3 です。

図2-8-3 出火要因別火災状況



ア 取扱方法関係

「取扱方法不良」に起因するものは24件発生しており、石油設備機器の火災に占める割合は44.4%となっています。内容をみると、「引火する」が8件、「使用中給油する」が5件などとなっています。「使用中給油する」はカートリッジタンクの口金が完全に閉まっていなかったため灯油がこぼれて出火したものなどがあります。

イ 維持管理不適関係

「維持管理不適」に起因するものは11件発生しており、石油設備機器の火災に占める割合は20.4%となっています。重油ボイラのメンテナンスをしていなかったためボイラ内に煤が付着して異常燃焼を起こし、供給された重油に着火したため吹き返して出火したものなどがあります。

ウ 取扱位置不適関係

可燃物の「取扱位置不適」に起因するものは9件発生しており、石油設備機器の火災に占める割合は16.7%となっています。石油ストーブの上に干していた洗濯物の落下や、石油ストーブの天板上に洗濯かごなどの可燃物を置いたまま点火したために出火したものがあります。

このような火災を防止するためには、石油ストーブ等を使用する際は、周囲の状況をよく確認して使用することが必要です。

エ 可燃物の取扱不適関係

「可燃物の取扱不適」に起因するものは4件発生しており、石油設備機器の火災に占める割合は7.4%となっています。石油ストーブ等の近くに衣類等の可燃物やエアゾール缶等を置いたために、石油ストーブ等の放射熱により可燃物から出火、若しくはエアゾール缶等が破裂して出火したものなどがあります。

9 その他の出火原因

- 雷の火災が前年と比べて増加しました。
- ロウソクの火災で死者が発生しました。

ここでは、前述した出火原因以外で、火災件数の比較的多いものや、特異な出火原因についてみていきます。

表 2-9-1 その他の出火原因

出 火 原 因	火 災 件 数									損 害 状 況				
	合 計	建 物					車 両	林 野	そ の 他	焼 損 床 面 積 (㎡)	焼 損 表 面 積 (㎡)	損 害 額 (千 円)	死 者	負 傷 者
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や								
ロ ウ ソ ク	52	52	3	4	12	33	-	-	-	577	186	117,856	2	30
布団等の再燃	19	17	-	-	4	13	-	-	2	26	4	2,353	-	2
雷	22	12	-	-	1	11	-	-	10	-	1	1,493	-	1
収 れ ん	3	2	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-

(1) ロウソク

抽出条件：①発火源分類コード 「41701 ロウソク」、「41702 灯明」、「41703 ちょうちん」、「41704 灯ろう」、
「41705 走馬灯」

②経過分類コード 「911 放火」、「912 無意識放火」、「921 放火の疑い」、「931 火遊び」を除く。

ロウソクによる火災(放火及び火遊びによるものを除く。)は 52 件で、前年と比べて 6 件減少しています。すべて建物からの出火で、その用途をみると、住宅や共同住宅等の居住用途

図2-9-1 ロウソクによる火災の経過

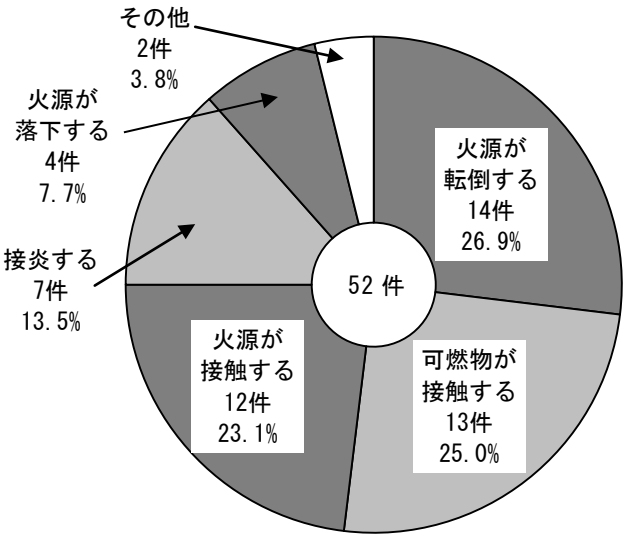
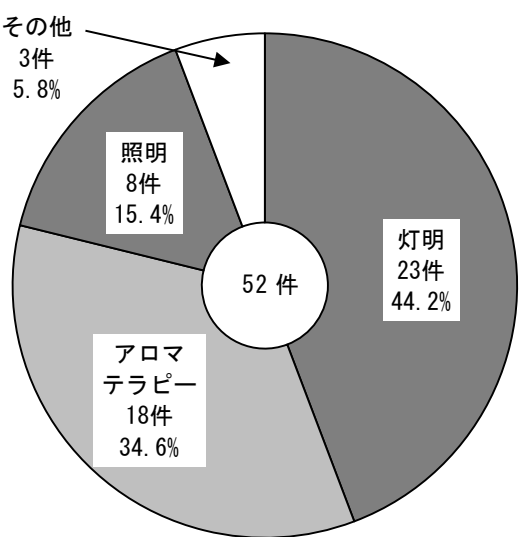


図2-9-2 ロウソクの使用目的



部分から48件(92.3%)発生しています。

また、ろうソクの火災による死者は2人で、前年と同人数となっています。

ろうソクによる火災の経過をみたものが図2-9-1、使用目的をみたものが図2-9-2です。

図2-9-1でろうソクによる火災の経過をみると、ろうソクが転倒したものが14件(26.9%)、次いで可燃物がろうソクに接触したものが13件(25.0%)、ろうソクが可燃物に接触したものが12件(23.1%)などとなっています。

図2-9-2でろうソクの使用目的をみると、「灯明」、「アロマテラピー用ろうソク」、「照明」に大別され、以下使用目的別にみていきます。

ア 灯 明

仏壇や神棚、祭壇等で使用される灯明による火災は23件(44.2%)発生しており、前年と比べて2件減少しています。

出火の経過をみると、灯明の転倒によるものが8件(34.8%)、可燃物が灯明に接触したものが6件(26.1%)、接炎によるものが4件(17.4%)などとなっています。

灯明の接触・転倒および落下の原因としては、灯明を不安定な状態で使用したり、灯明が溶けて短くなり、近くの可燃物に接触したケースなどがみられます。

接炎や可燃物の接触では、仏壇内の狭い空間に灯明を供えることにより、その炎が供えてある可燃物に触れたものや、供え物をしようと手を伸ばした際に着衣に火が着くことによるものなどがあげられます。

灯明の火が着衣に着火した火災は6件で、前年と比べて3件増加しています。そのうち4件(66.7%)が65歳以上の高齢者によるものです。

事例 1 灯明を点火したまま放置したため出火した火災（8月・八王子市）			
構造・用途	防火造 1/0 住宅	出火階・箇所	1階・居室
焼 損 程 度	建物全焼 2 棟、部分焼 1 棟、ぼや 1 棟 焼損 負傷者 1 人		
この火災は、住宅の 1 階居室から出火したものです。			
出火原因は、火元者が仏壇の灯明に点火したままその場を離れたため、何らかの原因で灯明が転倒し、出火したものです。			
火元者は庭の草刈りをしていたところ、台所の窓から黒煙が出ていたため室内を確認すると、居室の仏壇が燃えているのを発見しました。			
火災発見後、バケツに水道水を汲み初期消火を行いましたが、消火できず避難しました。			

イ アロマテラピー用ろうソク

様々な香りを手軽に楽しめ、リラクゼーション効果が得られるアロマテラピー(芳香療法)は、広く普及する一方でアロマテラピーに関連した火災が発生しています。

平成25年中のアロマテラピー用ろうソクによる火災は、18件(34.6%)発生し、前年と比べて5件増加しています。この火災による負傷者は9人で、前年と比べて1人増加しています。

出火した用途別にみると、住宅や共同住宅などの居住用途が 16 件、診療所、事務所が各 1 件となっています。

出火の経過をみると、可燃物がろうソクに接触したものが 7 件 (38.9%)、ろうソクが可燃物に接触したものの、接炎によるものが各 3 件 (16.7%)、ろうソクが転倒したものの、ろうソクが落下したものが各 2 件 (11.1%) などとなっています。取扱場所が不適切で周囲の可燃物に着火したり、取扱いの不注意で立ててあったろうソクが倒れたりして出火しています。

ウ 照 明

電気の供給を止められた居住用途部分等で、明かりとして使用されたろうソクや、室内の雰囲気作りのために使用されたろうソクによる火災は、8 件 (15.4%) 発生し、前年と比べて 9 件減少しています。

出火の経過をみると、ろうソクの転倒によるものが 4 件 (50.0%)、ろうソクが可燃物に接触したものが 3 件 (37.5%)、可燃物が落下してろうソクに接触したものが 1 件 (12.5%) となっています。

(2) 再燃火災

抽出条件：経過分類コード 「321 消したはずのものが再燃する」

ここでいう「再燃火災」とは、行為者が火災に対して消火行為を行い、消火できたと思われたものの、火種が残っていたため数時間後に再び燃え出して火災となったものをいいます。

平成 25 年中は 19 件発生しており、前年と比べて 12 件減少しています。再燃前の火災の発火源をみると、たばこによるものが 9 件 (47.4%) と最も多く、このうち寝たばこに起因したものが 3 件 (33.3%) で、たばこ全体の 3 割以上を占めています。

再燃前の火災の消火方法と再燃物品をみたものが表 2-9-2 です。

再燃物品をみると、毛布や敷布、布団などの寝具類が合わせて 19 件 (100.0%) で、再燃火災の全火災となっています。

最初に発生した火災の消火方法をみると、コップ・ポット・洗面器等の水で消火を行ったものが 11 件 (57.9%) と 6 割近くを占めています。

コップ・ポット・洗面器等の少量の水をかけたり、もみ消す・叩き消す・濡れたタオルを被せるといった消火方法では、布団類等の内部まで消火しきれず火種が残り、再燃する可能性があります。

表 2-9-2 再燃前の消火方法と再燃物品

再燃前の火災の消火方法	再燃物品			
	合計	寝具類	寝具類以外の繊維製品	その他
合計	19	19	-	-
コップ・ポット・洗面器等の水をかけた	11	11	-	-
直接水道の水をかけた	2	2	-	-
叩く・揉む・踏む等で消した	2	2	-	-
その他	4	4	-	-

事例2 電気ストーブに起因する再燃火災（12月・台東区）			
構造・用途	耐火造 4/0 複合用途（住宅、飲食店）	出火階・箇所	2階・居室
焼 損 程 度	建物部分焼 1 棟 2 階 2 m ² 焼損		
この火災は、複合用途建物 2 階の住宅居室から出火したものです。 出火原因は、居住者が電気ストーブを点けたまま就寝しところ、掛け布団が接触して出火したため、気付いた居住者が叩き消し、その後居室の押入れ付近に置いて再度就寝したところ、残っていた火種が時間の経過とともに再燃したものです。 就寝していた居住者は、焦げくさい臭気と熱気で目を覚まし、掛け布団が燃えているのを発見しました。火災発見後、2 階廊下に設置してある消火器で初期消火しました。			

(3) 雷

抽出条件：経過分類コード 「841 落雷する」

雷による火災は22件で、前年と比べて16件増加し、そのうち直接雷によるものが4件、間接雷によるものが18件発生しています。月別発生状況をみると、8月に12件、7月に6件、9月に3件、6月に1件発生しています。

火災種別と程度をみると、建物火災ではぼやが11件で部分焼が1件、その他の火災が10件となっています。

(4) 収れん

抽出条件：経過分類コード 「991 収れんする」

収れんとは、太陽からの光が何らかの物体により反射又は屈折し、これが1点に集まることをいいます。反射又は屈折により太陽光が1点に集中した場所に可燃物があると、発火に至る場合があります。

収れんによる火災は3件で、前年と比べて2件減少しています。発火源は、ステンレス製のボール等の凹面鏡によるものが2件、ガラス瓶等の凸レンズによるものが1件発生しています。月別発生状況をみると、1月、7月、11月に各1件発生しています。

火災種別は、建物火災のぼやが2件、その他の火災が1件となっています。

事例3 収れんにより出火した火災（1月・港区）			
構造・用途	耐火造 46/2 複合用途（共同住宅、店舗等）	出火階・箇所	10階・居室
焼 損 程 度	建物ぼや 内壁若干焼損		
この火災は、複合用途建物 10 階の共同住宅部分から出火したものです。 出火原因は、居室の窓際にあるテーブル上に置かれていた凹面鏡により、室内に差し込んだ太陽光線が反射し、内壁で収れんし出火したものです。 外出していた居住者が帰宅すると、居室内壁に焦げた跡があるのを発見しました。 発見時すでに自然鎮火していたため、初期消火は行われませんでした。			